

花を詠む

桑原専慶流いけばな展作品集

2011年11月2日(水)～7日(月)

大丸ミュージアム京都

花を詠む



I K E B A N A
KUWAHARA SENKEI SCHOOL

花を詠む
前期「古典調」 後期「現代調」

桑原専慶流 いけばな展



桑原専慶流 いけばな展



平成23年11月2日(水)→7日(月)
前期 11月2日(水)→4日(金) 後期 11月5日(土)→7日(月)

大丸ミュージアム〈京都〉[大丸京都店6階]

●主催:桑原専慶流家元
●入場時間:午前10時～午後7時30分(午後8時開場)
11月4日(金)と最終日は午後4時30分閉場

●東京の高層金庫に
ご協力お願いします。
●入場無料



DAIMARU

京都店
電話:075)211-8111
www.daimaru.co.jp

桑原専慶流いけばな展

「花を詠む」開催にあたって

心の和

旧東ドイツの街はずれの村。古い館での公開いけこみ。館の庭に植えこまれたジャーマンアイリスが色とりどりに咲いていた。

この季節の輝きを日本のクラシカルな生花にと葉の一枚一枚、花もよく選んで必要なだけ切って大事に大きな水盤にいける。小石で剣山をかくして手をおいた。

じつと見ていた皆さんが和やかな表情で私をとりかこんでいる。心地よい「和」を感じた。

村の村長さんが私にこう語ってくれた。

「子供のころ、学校の先生が麦畑で詩を朗読してくれた。風で穂が波打つように、心に大きな波がやってきた。その感覚を思い出しました」

ただ無心に花をいけることから、思いがけない風を人の心に届けることができる。自然の美しさへの共感、人と人の心をつ結びつけてくれるのだ。そこにいけばなの大きな意味があることを実感した。

私が家元を継承して七年の節目に「花を詠む」をテーマにしたいけばな展を流派の力を集結して開催させていただいた。

植物に触れながら、心で感じとった「美」を形にする「いけばな」。花と心を通して、自分の心の中の花をいけばなに詠みこむ。

私たち「花詠み」のいけばなで、皆様との「心の和」がつくれますことを念じて。

桑原専慶流家元十五世

桑原 仙溪

■後期展「現代調」—————● 11月5日(土)～7日(月)

桑原 仙齋 花叟	宮本 京泉 家元補佐	宇野 民水 家元補佐	古賀 慶暢 総目代
	石井 慶月 家元補佐	小林 祥雲 家元参事	大丹生 慶愛 華監
桑原 仙溪 家元	柚木 芳艶 家元補佐	赤木 雅芳 家元補佐	岡下 慶佳 華監
	赤沢 作豊 家元参事		
桑原 櫻子 副家元	太田 博泉 師範理事	長尾 慶淑 家元補佐	辻 慶清 総目代
	甲斐 幸泉 家元参事	小寺 慶妙 家元補佐	川田 慶美 目代
桑原 慶華	福武 靖風 師範理事	片山 実己 家元補佐	中村 慶廣 目代
	三宅 千華 師範理事		岩井 慶悦 目代
桑原 素溪	光岡 典泉 師範	風早 利葉 家元参事	
	山本 康月 師範	佐藤 京扇 師範	岡本 慶徳 目代
桑原 慶寅		中田 江津華 師範	富田 慶礼 目代
			中山 慶元 目代
原 遊泉 花叟	横田 慶重 家元補佐	辻本 慶文 家元補佐	大野 慶友 総華監
	藤本 慶隆 総目代	山本 慶智 家元補佐	
小野 静泉 華老	山田 慶克 華監	田村 慶澄 総目代	長谷川 慶文 目代
	高橋 慶嘉 華監	辻垣 慶嘉 華監	大江 慶昌 華監
濱村 慶章 家元補佐	稗田 慶智 華監		服部 慶晴 華監
阪田 慶寿 家元補佐	矢野間 慶陽 華監	中田 利華 師範理事	伊藤 慶和 師範
中山 慶泉 華監	高楠 慶幸 華監	吉田 真葉 師範幹事	
	東中川 慶智 華監	小川 玉裕 師範理事	小泉 慶哉 目代
山本 竹泉 家元補佐	山本 慶紀 師範	小川 亀井 陽春 師範	秦 慶久 華監
大本 都泉 総務	家坂 慶真 師範		藤井 慶也 師範
三宅 和泉 総務		朝倉 慶佐 家元補佐	岡野 慶裕 師範
	原 誠泉 家元補佐	北川 慶法 家元補佐	
川合 慶陽 家元補佐	原 映泉 家元参事	廣田 慶喜 家元補佐	中村 慶佳 総華監
川瀬 慶裕 家元補佐	原 麗歩 師範		尾関 慶園 総華監
惣司 慶寛 総目代		二井 慶博 家元補佐	鹿野 慶正 総華監
新井 慶珠 総目代	北川 慶緑 家元補佐	古賀 慶和 華監	井尻 慶聡 総華監
	中村 慶美 総目代	豎山 慶伊 華監	北川 慶則 華監
室山 粹声 家元補佐	中井 慶里 総目代	永田 慶悦 華監	中川 素心 師範
石井 清月 家元参事			
白石 美芳 師範幹事	渡辺 義風 家元補佐	成瀬 慶堇 家元補佐	佐藤 慶由 総華監
	小野 京苑 家元補佐	岡村 慶雪 華監	釜井 慶経 華監
小菅 慶節 家元補佐	尾崎 洋風 家元補佐	中野 慶里 師範	佐藤 慶美 華監
今井 慶孝 総目代	三宅 玉圓 家元参事		上野 慶里 華監
今村 慶悟 総目代	山本 香秋 師範幹事	長谷川 慶紘 総目代	
	古川 生藻 総務	後藤 慶節 総目代	安藤 慶津 華監
宮原 仁恵 家元補佐	春名 仁風 総務	中西 慶由 目代	近藤 慶聡 師範
石井 真正 家元補佐		藤原 慶陽 総華監	谷口 慶喜 師範
田村 悦華 師範	清水 慶富 家元補佐	森本 慶隆 総華監	村田 慶紫 師範
	林 慶綾 家元補佐	奥井 慶和 総華監	
土田 慶美 家元補佐	森本 慶明 総目代	村松 慶真 華監	吉田 慶圓 華監
佐藤 慶友 総華監			金岡 慶希 華監
永井 慶真 華監			新井 慶晴 師範

■前期展「古典調」—————● 11月2日(水)～4日(金)

桑原 仙齋 花叟	岩沢 雅芳 家元補佐	石井 慶喜 家元補佐	足立 慶英 総目代
	三近 碧風 師範理事	田代 慶操 家元補佐	鈴木 慶由 華監
桑原 仙溪 家元	坂本 和翠 師範	則岡 慶理 家元補佐	片岡 慶聡 師範
		秦 慶雅 目代	
桑原 櫻子 副家元	和田 慶千 家元補佐		武立 慶悦 総目代
	中島 慶雅 家元補佐	吉田 房水 家元補佐	赤木 慶希 総目代
桑原 慶華	二井 慶博 家元補佐	野瀬 千水 師範理事	塚本 慶陽 総華監
	毎川 慶友 総目代	岩崎 範生 総務	船本 慶香 華監
桑原 素溪	吉川 慶雪 総華監		
	島 慶和 総華監	阪本 慶純 家元補佐	中村 慶典 総目代
桑原 慶寅	今井 慶紀 師範	井内 慶君 総華監	中村 慶松 目代
		廻戸 慶節 華監	岡本 慶靱 華監
上野 淳泉 華老	板谷 楽泉 家元補佐	川島 慶理 華監	浅井 慶知 師範
	高谷 尚芳 家元参事		
岩田 慶壽 華老	谷口 幸泉 家元参事	山本 松風 家元参事	木村 慶澄 総目代
		今井 敏芳 師範	瀬津 慶房 総目代
竹中 慶敏 華老	尾崎 慶和 家元補佐	渡辺 玉壺 師範理事	中塚 慶佳 総目代
	河野 慶雅 家元補佐		川喜多 慶美 目代
武田 慶園 華老	河野 慶美 目代	小寺 慶枝 家元補佐	中井 慶貞 目代
		安達 慶令 総目代	竹原 慶順 目代
竹内 慶陶 家元補佐	原田 旭泉 家元補佐	白崎 慶穂 目代	中谷 慶華 総華監
藤田 慶綾 総目代	友延 美泉 家元補佐		仲岸 慶有 華監
鍵村 慶好 華監	三宅 竹泉 家元参事	井上 玉溪 家元参事	竹原 慶巖 華監
		岡田 頼芳 師範理事	下村 慶哲 師範
鈴木 秀映 家元補佐	三木 慶善 家元補佐	小野 玉祥 師範理事	
大崎 太湖 家元補佐	矢野 慶良 総目代		石田 慶知 総目代
小野 樹仙 家元補佐	高瀬 慶節 総華監	杉浦 慶弥 家元補佐	筒井 慶敏 総目代
岡部 華秋 家元補佐		中西 慶文 総華監	池田 慶裕 総目代
松村 溪光 家元補佐	梶房 龍雲 家元補佐	井上 慶則 華監	
白神 紅葉 家元補佐	吉田 英楽 家元補佐	鹿目 慶明 師範	松本 慶季 総華監
平川 弘華 家元補佐	渡辺 慶松 家元補佐		西田 慶詔 華監
谷野 和風 総務		平松 栄泉 家元参事	吉住 慶潤 華監
	米山 慶嘉 家元補佐	中務 知泉 家元参事	
曽根 慶豊 家元補佐	関和 慶弘 家元補佐	阿部 篁泉 総務	
吉田 慶史 家元補佐	戸泉 慶直 家元補佐		伊藤 慶美 家元補佐
北村 慶美 総目代	中道 慶清 家元補佐	伊藤 慶美 家元補佐	大野 慶京 師範
野口 慶和 目代	滝本 慶由 総目代	大野 慶京 師範	千田 慶真 師範
柳生 慶公 目代	大村 慶重 目代		
竹端 慶京 総華監	竹中 慶恒 華監		
門田 慶英 総華監		中原 翠浦 師範幹事	翠浦 芳月 師範理事
三田 慶智 総華監	小津野 雅翠 家元補佐	森永 芳月 師範理事	中桐 智芳 師範
植野 慶栄 華監	坪井 二葉 家元参事		
門田 慶香 師範	小原 淡翠 家元参事		

父、仙齋のいけばなは、立花にせよ生花にせよ、自由花はなおのこと、他の人の花とは違う独特の雰囲気がある。

きつと子供の頃から仙人に憧れていたという生き方そのものも、その中に加味されているのだろう。

それに旅先で見たり感じたりした印象深いものの記憶の鮮やかさも並外れている。

深く心に刻んで大切にしまわれている感覚の厚みが父のいけばなの源泉のように思う。

心で感じとった「美」。

それを形にするのがいけばなだとよく云っている。

そのようにして花を生けるならば、それはまさに「花を詠んでいる」と云えないだろうか。

「花を詠む」というと俳句や短歌を連想するが、私たちのいけばなこそ、心の中の花をいけばなに詠み込むべきだと思う。

そんなことを考えて、この度のいけばな展のテーマを「花を詠む」に決めた。

花に心を寄せて、感じとったものを表現する人を「花詠み」と呼んでみる。

いけばなの花詠みたちがつどう秋の花展を存分に楽しんだ。

夢のような六日間だった。

前期展「古典調」





「白檜曾の立花」

花材 白檜曾 晒木 赤椿

天南星の実 あららぎ

しのぶ 黄金羊歯

花器 碧釉陶深鉢
(市川廣三作)

桑原 仙溪

はじめは別の方達にあてていた花器だったが、この凄い枝を受け止めてくれる器は他になかった。
家では「富士山」と呼んでいる。富士山を逆さまにしたような形なのと、たつぷりと水をはった時のその風格は、まさにマウント富士に匹敵すると思う。
市川さんはどんな思いでこの器を焼いたのだろう。
凄い枝を凄い器にいける至福の時。



「深林」

花材 杜松の晒木

杜松

寒牡丹

赤椿

東洋蘭

花器 方形土器

桑原 仙齋

素晴らしい杜松の枯幹である。深い山の斜面で長年風雪に晒されてこんな色になっていったのだろう。

杜松は別名鼠刺とよばれるが、固い針葉は革手袋をはめて扱わないと痛い。京都の山の中にも生えているが、この砂の物に用いたような立派なのはなさそうである。しかもこんなに見事に白く晒されたのは始めて見た。楽しんで立てた砂の物である。



「牡丹」

花材 牡丹 中川菊
花器 煤竹球籠
(竹又作)

桑原 櫻子

牡丹をいける時は語りかけるように。
切る時も、挿す時も私は牡丹と話している。謝る事が多い。
向こうは何も話さないが綺麗に咲いて応えてくれる。
上品な温かさを感じるから取り合
わせも難しい。
いける場所も器も特別な何かを感じ
てもらえたらと思う。



「枯葦 菊」

花材 葦の穂
當麻菊
花器 斑文水盤
斑文大壺
(近藤豊作)

桑原 慶華

「熱い秋でした」
今回の「花を詠む」は、前期・後期ともに大盛會に終わる事が出来ました。出品者の皆様、御助力を頂いた関係者の皆様に心より御礼申し上げます。今回の花展では配置や Lighting、音響などがそれぞれの作品と見事に調和し、雰囲気もよかったです。
これは観て下さるお客様にとっても、見易くてより効果的にご覧頂けたかと思えます。欲張って、作品数を増やすと花席も狭くなり、折角のお花も見映えが損なわれる事になっては勿体ないと思います。また合作という事で、普段のお稽古では味わえない共同作業もいつもとは違う目線や気付きに恵まれる良い機会であるかもしれません。今回は出品者の『和』が素晴らしいハーモニーを奏でていました。また、息子二人と初めて一緒に出品出来に残る流展となりました。



「垂柳檜葉」
すいりゅうひば

花材 垂柳檜葉
椿

花器 紺緑釉陶鉢
(清水保孝作)

桑原 素溪

垂柳檜葉は比翼檜葉より葉が長く垂れ下がっている。

花材としては初めての品種である。

素溪はこれをいけてみると云う。和則伯父ちゃんに手伝わせていたが、その枝はもつと左に張らせて、とか注文をつけながらいけ上がった。

花器ともよく合ったいけばな展の生花である。

ピンクの椿がかわいい。(仙齋記)



「柘榴」
ざくろ

花材 柘榴

泡黄金菊(菊溪菊)

野紺菊

花器 掛分釉花瓶

(清水保孝作)

桑原 慶寅

とり合わせ、そして花器も櫻子叔母ちゃんと相談。

菊溪菊は円山公園の南側の小さな谷川で作られた小菊。

以前、菊溪窯という陶器屋さんがあった。染付の秋草模様の器が得意な上品なお店だった。

どっしりした花瓶なので、重い柘榴の実がうまくとまったようである。(仙齋記)



「梅擬の立花」

花材 梅擬

松 寿松

赤花満作

斑入椿 白玉椿

大菊 小菊 野菊

黄金伽羅

花器 青磁花瓶・天城窯

(大崎太湖作)

上野 淳泉 華老 岡山

伝統は永遠の流行。

立花という伝統の花に魅せられた私は、赤い実の美しい梅擬を真に立てて、実りの秋をいけてみました。



「菊一色立花」

花材 當麻菊 糸菊 小菊

北斗菊 乱れ菊

寒菊

花器 耳付陶花器

(宇野仁松作)

岩田 慶壽(故) 華老 京都

岩田先生とは三十年ちかく前に梓の会の研修旅行で越前へご一緒させていただいたことがある。昼間に産地を訪れて水仙を分けてもらい、宿舎の掘り炬燵で暖まりながら水仙の生花を皆さんと一緒にいけた。爆竹の竹筒にいけられた岩田先生の水仙は凛とした気品と少女のような可愛さがあり、お人柄が花にあらわれるのだなあと感じた事を覚えている。今回は「菊一色」を岩田先生のために立てさせて頂いた。菊たちはそれぞれに、三日間しゃんとしてくれていた。

(仙溪記)



「山菜莢の生花」

花材 山菜莢（実）
花器 黒釉大鉢

（竹内真三郎作）

竹中 慶敏 華老 京都

以前、日本いけばな芸術展にも山菜莢の実で生花をいけたことがある。その時は畑まで行き、好きな枝を切らせてもらった。今回、花フジが用意してくれた山菜莢は、太い幹から出た枝にたわわに赤い実がぶらさがって、枝がしなるほどであった。見事な枝とのしばしの対話。そのしなりと若枝の勢いの対比がおもしろい。

「寒桜と万年青の生花」

主瓶 花材 寒桜（子福桜）
花器 掛分陶花瓶

（清水保孝作）

副瓶 花材 万年青（曙）
花器 三つ足青磁

武田 慶園 華老 徳島

桑原専慶流のお花と出会えて幸せです。

私の教室も今年で五十年。社中の皆様と力を合わせて、多くの花展にも参加し、いつも精一杯取り組んで参りました。私の花人生でご縁を頂いたすべての方に感謝しています。



「仏手柑」
ぶっしゅかん

花材 仏手柑

仏手柑の斑入り葉

パンダ

花器 黒条文陶花器

(竹内真三郎作)

竹内 慶陶

家元補佐 京都

陶芸家に嫁ぎ夫の作品に私が花を活けていけばな展に出展したいと入門。三世代に亘って各家元先生諸先生に御指導賜り幸せです。花を愛し、花の命を大切に真摯に生涯学び続けたいと願っています。

藤田 慶綾

総目代 京都

十六才の秋、最初のお稽古の花はピンクのダリアでした。今この種類の花を観る事は無くなり代わって大輪の美しいダリアが店に並びます。花の種類は代わっても花を生ける心は変わりません。花に囲まれた仕事を選んで良かったと思います。

鍵村 慶好

華監 京都

今回このような大きな華展に参加させて頂きます事、心より嬉しく思っております。私にとつては初めての流展。日頃の勉強の成果が少しでも出せますよう頑張りたいと思います。「花を詠む」ような作品を作りたいと思います。



「倉敷晩秋」

花材 山帰来 鶏頭二種

紫陽花 雪柳

男郎花 夏櫨 晒木

花器 杯型陶花器

岩沢 雅芳 家元補佐 岡山

私たちの住む岡山の金光町は昔から植木の町として有名です。家の周りにも、生けてみたい花材が沢山あります。少し足をのばして東洋一の天文台がある暹照山に登ると、鮮やかに紅葉した木々や実をつけた山帰来が枝を伸ばしています。この大好きな故郷の自然に感謝し、深まりゆく秋の風情を一瓶に活けてみました。

三近 碧風 師範理事 岡山

秋が深まると、野山を散策したくなります。紅葉した木々や実をつけた枝。楚々と咲いている花を見つけると、本当に心がなごみ、幸せな気持ちになります。そんな穏やかな秋の日々を一瓶で表現してみました。

坂本 和翠 師範 岡山

流展に参加の機会をいただき、思いあふれる作品に出会えることをうれしく思います。忙しい毎日ですが、花を活けることを楽しみ、四季折々の花がいつも身近にある、心豊かな生活を送りたいと思っています。



「松と梅擬の立花」

花材 黒松 梅擬

山茶花 斑入伊吹

小菊二種

花器 緑釉方形大鉢

(大崎太湖作)

鈴木 秀映 家元補佐 岡山

今回の出品作は八人の仲間達と「楽しみながら活け込む」と云う言葉をモットーに進めてきました。集まる度に、友情も深まり、よい勉強になりました。桑原の伝承を誇る古典立花の出来ばえや、如何に・・・？

大崎 太湖 家元補佐 岡山

八人で、大作を生ける事が決まり、会場に合う花器を作ろうと思い、木型を造り大物用の土を配合し、造りました。夏には松葉の長さを決める剪定をしました。生ける時は八人で楽しく生けました。花形は行の真です。

小野 樹仙 家元補佐 岡山

「日本がんばろう」という思いを込めて、気品ある松の立華を生けました。いけばなを通じ、すさんだ気持ちをふるい起こし、明るく、あったかい気持ちになれば幸いです。メンバー全員力を合わせガンバっていった力作です。

岡部 華秋 家元補佐 岡山

古式豊かな松の立華大作は、松の重厚さを十分に感じ、男性的な立華として力量を集結し、松の緑梅もどきの赤、正真に黄の大菊と、一枝一枝心をこめて作品を仕上げ、「古典調」の会場にて全体を引き締める一作品を心ざして制作致しました。

松村 溪光 家元補佐 岡山

今回の流展で松の立華それも大作を活けさせていただくこと嬉しく思っています。立華の稽古を続けている中で「松の立華を活けるといふのは私の究極の願いでありました。気持ちを込めて「凛」とした作品をと思っています。

白神 紅葉 家元補佐 岡山

「松樹千年翠」の言葉のまま古典豊かな大作に参加させていただき、光栄に存じております。花の型は異なりますが、それぞれの奥深さに四季を感じ、喜怒哀楽に浸りつつ、絆を大事に参りたいと思います。

平川 弘華 家元補佐 岡山

先ず花器造りからはじまり、その大きさにびっくり！先輩の先生方の手際のよさにびっくり、何も心配することなく伝統花である立派な立華が出来上がりました。立華にはいろいろと技法があり、一つ一つ勉強していかななくてはならないと思った今回の作品でした。

谷野 和風 総務 岡山

古典調の大作に経験のない私が今回参加させていただき大変勉強になりました。立華の造形、或いはバランスなど先生方の手際よさにはただ感服するのみです。今回を機に精進してまいりたいと思います。





「里」

花材 柿
花器 銅砂鉢
花材 鳥兜 清澄白山菊
花器 陶水盤
花材 鶏頭
花器 備前焼水盤

曽根 慶豊 家元補佐 岐阜

花展は大変緊張します。日頃のお稽古とは又異なる気持ちで花の中に詰まっています。心静かに花に向かっている時は自分一人の世界、何物にも替えられません。年を重ねると共に、花への思いを大切にしたいと思っています。

吉田 慶史 家元補佐 京都

北村 慶美 総目代 愛知

今回程の大作は初めてです。これまでのお稽古で対処できるのか不安ですが、班の皆様と、またと無い作品に出会えた事を幸せに思い、今後に生かす事ができればと思います。

野口 慶和 目代 京都

いけ花を始めて三十年。二十代三十代は技術を学ぶという受け身姿勢のみだったが、近頃いけて楽しい、見て楽しい、自然体で自発姿勢で接しているのでは？と思う。いつのまにかいけ花が生（い）け花になりつつあります。

柳生 慶公 目代 岐阜

私はお生花が好きです。地域の華展でも、庭の葉蘭やさつき等を活けました。最近『あの枝は真に良いなあ』とか普段から注意して見るようになりました。季節に合った身近な花材を活かせるようになりたいと思っています。

竹端 慶京 総華監 大阪

私に花と向き合う姿勢、作品を作り上げる楽しさと喜び、時には人生観まで様々なことを厳しく愛情を持ってご指導下さいました、岩田慶寿先生を想い、感謝の念を込めて。

門田 慶英 総華監 京都

毎回、花材を観たときに、こんな花にしたいと想像します。思うようにはなかなかできないですが、

たまには意外にもよかったです。それが楽しくていけばなはやめられません。

三田 慶智 総華監 京都

生けられた花にはその人らしさが見てとれます。感性や花への思い、自身の生き方や人生観までも。「私らしい花」を私らしく。ライフワークのテーマです。花を縁につながら多くの方々を支えに感謝しながら。

植野 慶栄 華監 京都

ひとつでもお花の名前が覚えられたらと思っ始めたのですが、おもしろいです。お生花は難しいのですが上手にできた時の気持ちがとってもいいです。少しずつ続けていけたらいいと思っています。

門田 慶香 師範 京都

私は花をいけているときに無心になれる時間が好きです。故岩田先生ののっけりとした一言とんでもない日常会話がたのしくつつけてくれました。これからも先生の大切な教えを守っていききたいと思っています。





「楓の立花」

花材 青崖紅葉^{せいがいもみぢ}

松

白玉椿

晒木

花器 燐焼陶花器

(矢野款一作)

和田 慶千 家元補佐 大阪

詠むとは、詩歌、句等自然との繋がりが多い美しいものをより美しく感じて頂く為の工夫。一輪の蕾が開花し、その雰囲気、次の朝見た時の景色の変化を想像し期待しながら。時には感嘆する事もある。この喜びを大切に続けたい。

中島 慶雅 家元補佐 京都

結婚と同時に入った華道(はなのみち)。迷いながらフラフラ歩いて四十二年が過ぎました。お花を生ける事で、お花が活き、私も生

かされる。これからは楽しんで歩みたいと思います。

二井 慶博 家元補佐 京都

古来より花は神仏、恋、等の捧物とし、近代では日常生活で美しく咲き誇っています。三百余年の伝承のお陰で私達は古典を学べる喜びに感謝いたします。一人でも多くの人達に伝える事が出来れば幸いです。

毎川 慶友 総目代 福井

いにしえの昔より、絶え間なく繰り返す自然の営み。その中で生き続ける人間。胸が張り裂ける事が起きても季節になると花は咲く。空はあくまでも広く、海も青く澄んでいる。再び巡り合えた花を胸に刻みいけたい。

吉川 慶雪 総華監 奈良

四季に分かれ気候の変化と共に多くの花に出合う事が出来、花の出生をよく知り、器を選び、花の彩

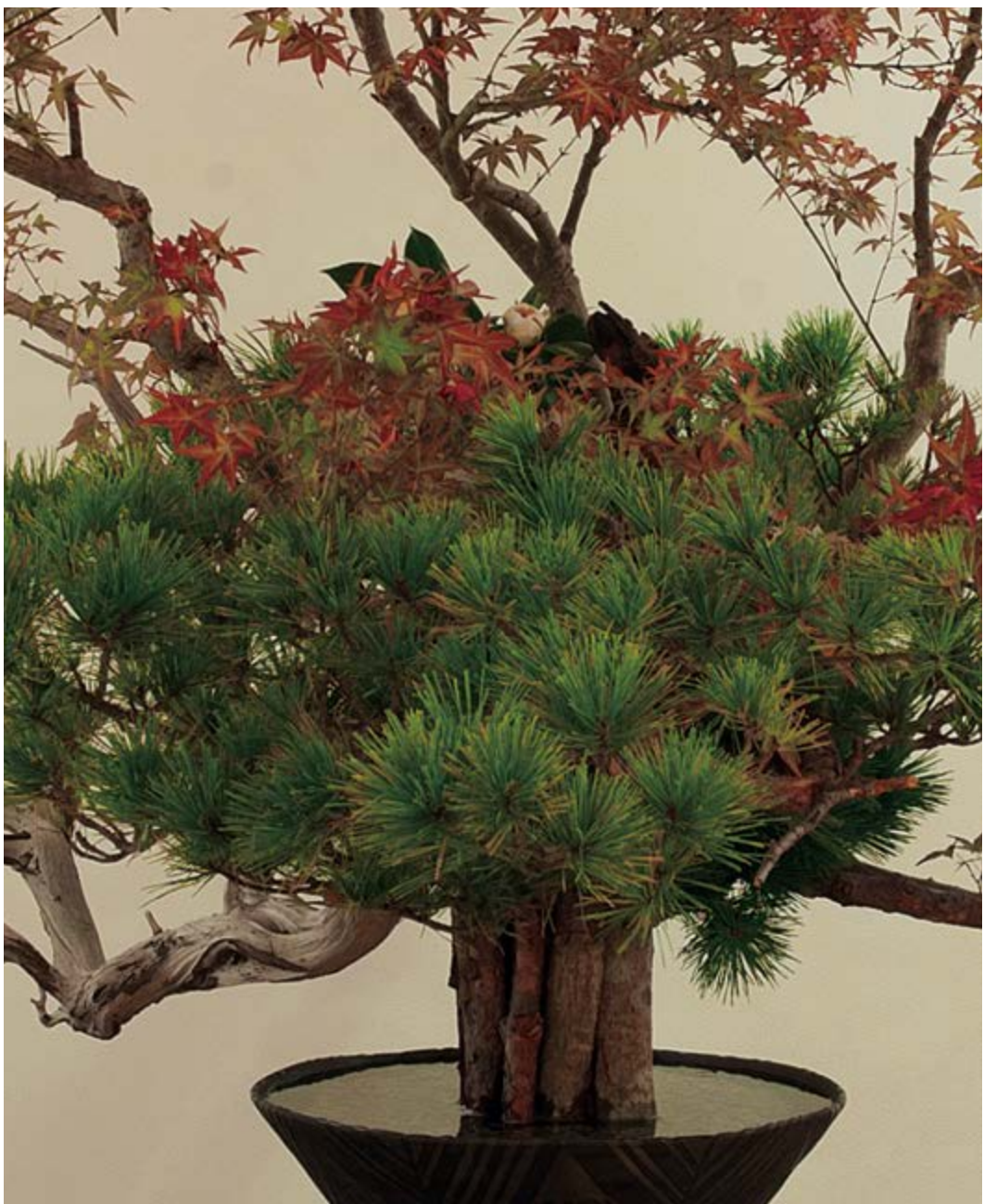
りを詠みながら活ける事が出来る環境に満足しつつ、次の花を活ける時には花がもつと喜んでくれるようにと努力しています。

島 慶和 総華監 京都

花屋として仕事でお手伝いするのと、出品もするので戸惑いながら、楽しくよい経験ができました。とにかく花材を適所におさめるのに精一杯で、花を詠むというには程遠いですが、この世界に入った事で先生方、皆様方に出会えた事に感謝して、これからも精進します。

今井 慶紀 師範 京都

生け花に親しみ始めて思う事、それは人と同じ様に性格があると言う事。凛として意思を貫く花。嬌めやすい花。控えめな花。花を観察し、なでて、ひねって、花と対話しながら生ける。そんな喜びを今感じ始めています。





「立花 松一色」

花材 松
花器 古銅立花瓶

尾崎 慶和 家元補佐 徳島
「花を詠む」のポスターを見ていると色の取り合わせ配分等言い様のない美しさに感心し、こんなお花が入ればと足元にでも近づく事が出来たらと思いつく何回となく眺めています。二代続いて流展に出品でき嬉しいです。素子先生見守って下さい。

河野 慶雅 家元補佐 徳島
生け花を始めて六十年が経ちますが、これからの心の眼でお花を見て楽しみたいと考えております。

河野 慶美 目代 徳島
立華を入れる度にその奥深さを感じています。百年を越える樹齢の古木と出逢ったりするとその大きなパワーと不思議な縁を感じます。生け花を通して沢山の出逢いがある事を大切にしていきたいです。



「生花 掛五重 昇り龍」

花材 這柏槇
花器 五重切り竹筒

板谷 楽泉 家元補佐 岡山
花を愛でるには心の余裕がなければいけません。昇り竜は勢いよく天空に登る竜です。いつの時もかわらず、花を愛でる心の余裕をもって、明るく勢い良く、昇り調子でありたいと思っています。

高谷 尚芳 家元参事 岡山
季節ごとの花々を活ける事を目標に、生花を稽古してきました。枝振りや葉の選び方等、毎回悩む事ばかりです。うまく活ける事が出来た時は、達成感があります。これからも、稽古を続けていこうと思います。

谷口 幸泉 家元参事 岡山
私のまわりには、お花を楽しむ友がいます。友のまわりからよろこびが伝わってきます。たかさんの師と友から、あたたかいしあわせが満ちてきます。幸せを、ありがとう。



「蘇鉄の生花」
そてつ

花材 蘇鉄
花器 銅砂鉢

原田 旭泉 家元補佐 岡山

ふりかえってみると、花と歩んだ道は長い。前を見ると遠さに戸惑う。そして今の自分はまだ！まだ！の思いです。長生きしたお陰で流展に出品できる事に感謝しています。今の自分に出来る、力一杯の蘇鉄の生花を生けました。

友延 美泉 家元補佐 岡山

いけ花を始めて、長い年月が過ぎました。四季がはつきりしている日本の自然を素直に受け入れ感謝し、無理のない生き方をして、今後も楽しみたいと思います。

三宅 竹泉 家元参事 岡山

二人三脚で花の道を歩んでいた両親をみて育った私は、父の亡き後は母と二人三脚で歩んでいます。いつまでたっても子供の私は、機会があれば一人で歩めるようになりたいと思っています。今回も母と一緒にがんばります。



「梅擬の生花」

花材 梅擬 白玉椿
花器 燐焼陶花器
(矢野款一作)

三木 慶善 家元補佐 徳島

矢野 慶良 総目代 徳島

徳島の写真家の方が、桑原専慶流の花は良いねとおっしゃって下さいます。有難う御座居ます。嬉しいですよ、今回の花を詠むもそう云って下さる方が多いと思います。京都時代から徳島と、花に癒されております。

高瀬 慶節 総華監 徳島



「山帰来の立花」

花材 山帰来 槇柏
松 躑躅 衝羽根
鶏頭 小菊 おなもみ
晒木 紫陽花の葉
花器 銅立花瓶

梶房 龍雲 家元補佐 岡山

御家元が「自然の物を生けて下さい。」との事で、この作品が生け上がりました。

吉田 英榮 家元補佐 岡山

秋野山を散策しながら探しあてた花材を使い活けてみました。自然の中に身を置くと日常の雑事も忘れ、心が落ち着きを取り戻します。その上、良い花材に出会えた時は、どのように活けようかと考えるのも楽しみです。

渡辺 慶松 家元補佐 広島

花は足で活けると云う言葉がある先生から教えていただいた。立花を始めて久しい私もその言葉が少しでも理解できるようになってきた。花展のたびにもっと良い作品をと思いながら、今も挑戦中である。



「立花 水仙一色 砂の物」

花材 水仙
寒菊 小菊
花器 銅砂鉢

小津野 雅翠 家元補佐 岡山

水仙が咲き始めるとその清らかさと香りに魅了されます。水仙一色の立花は十一月より三月頃まで季節を追いながら立てる楽しみがあります。派手さはありませんが、のどかな美しさに感動します。

坪井 二葉 家元参事 岡山

春に先がけて清楚に咲く水仙が大好きです。花の少ない時期楽しめる花。庭を立体的に見せてくれる花。葉と花一本一本に針金をおす時の精神統一。難しいけれど好きです。美しい直線と優雅な曲線。完成した花に感動します。

小原 淡翠 家元参事 岡山

水仙立花と初めて出合ったときにその清々しさと凛とした姿に魅了されました。それ以来水仙に挑戦してみたいと思い此の度このような機会があることに大変喜んでいきます。



「蝦夷松の立花」

花材 蝦夷松 晒木

アララギ 白玉椿

木瓜 杜若

花器 耳付陶花器

(清水六兵衛作)

米山 慶嘉 家元補佐 大阪

今回は七人合作の立花を出品いたします。日頃の忙しさを忘れ、個性豊かな花々に囲まれてのひと時を皆様と共有出来ることを楽しみにしております。大勢の方に観ていただきたいと願っています。

関和 慶弘 家元補佐 大阪

自然の四季毎の花、樹どれも人の心に感動を与えます。いけ花を深く知るほど妙味を得ることが出来、私にとっては、挑戦、気分転換、勇気づけられてきました。今後とも携われることに感謝し、他の人にも伝えていきたい。

戸泉 慶直 家元補佐 福井

花好きの私にとっては花をいけ飾ることは生活の一部です。いけている時は無心になれます。そして、いけ終わった時、ほのかな幸せを感じます。「最後は趣味ですよ」と教えて下さった素子先生に感謝しております。



中道 慶清 家元補佐 大阪

「学ぶ、磨く、活かす、伝える、和を作る」家元襲名の折伺いました。その後の私にとって、いろいろな事に関わるたびに励みとなり深く心に残る言葉です。花と向き合う時間を楽しみ、人との連を大事にしたいと思っています。

滝本 慶由 総目代 京都

事務局に入り、今迄は外からの流展でしたが、初めて内から携わり驚くほどの仕事量、日々の準備期間中本当に大変でしたが、私自身物凄く勉強になり、今後に繋がればと・・・又新たに花の持つ魅力とパワーに元気をもらい感謝しました。

大村 慶重 目代 大阪

幼い頃スポーツ少女だった私が行儀見習いで始めた花の道 生花は心を癒し、慰め又清しい気持ちにさせてくれました。人と人を和で繋ぎ、海外での花展も経験し交流を深めて私の世界を広げてまいりました。

竹中 慶恒 華監 京都

新しい気持ちで、これから活けていきたいと思っています。



「秋になつて」

花材 満天星

杜若

寒菊

花器 緑釉陶水盤

(木村盛伸作)

石井 慶喜 家元補佐 大阪

若いときは苦心惨憺、無理をしていけていました。近年大先輩に「貴女のいけ花はホツとするネ」と言葉をかけて頂いてから、ご覧いただく人の心に、清涼感をもたらす様ないけ花でありたいと願っています。

田代 慶操 家元補佐 大阪

日々の暮らしの中でいけばなは身近に美しい自然の命を感じることが出来心の喜びとなぐさめになります。生活に密接に結びついて暮らしを美しくゆたかにする。ここにいけばなを習得する本来の意義がある様に思います。

則岡 慶理 家元補佐 大阪

旅先で思わぬ花に出会う時がある。自然の中で咲いている花々に心踊り、この花を生けるならどんな器を選ぶだろうと想像する楽しいひととき。季節を感じ見る人の心に残る様な、そんな花が生けられたら本当に幸福な事と思う。

秦 慶雅 目代 和歌山

花を通して、春は、おだやかな風、夏は、さわやかな風、秋は、色どりの風、冬は、ぬくもりの風を見る方々の心に届くように花の美しい力を信じて生けてみたいと思っています。

「生花 檀と水仙」

花材 檀

花器 陶花瓶

(宮下善爾作)

花材 水仙

花器 陶水盤

(矢野款一作)

吉田 房水 家元補佐 岡山

真弓の華やかさと水仙の静かな風情とで晩秋から初冬にかけてを表現する。形は心を引き出し、心は形を動かす精神は正に生花に当てはまると思います。唯一途にお稽古が好きで続いています。お花を通じて素晴らしい仲間へ感謝。

野瀬 千水 師範理事 岡山

「お花の生け方にもその人らしさが伺える」とよく言われます。会場に見合うダイナミックさの中にも線をみきわめ優雅さも表現できたら最高です。初めての出瓶で緊張しますが、先輩諸姉の力を借りて頑張ります。

岩崎 範生 総務 岡山

何もしないのに今年もそろって芽を出しぐんぐん伸びてゆく水仙の真っ直ぐな生命力を嬉しく見つめているこの頃です。いつも自然の美しさ逞しさに、魅せられ、教えられ、季節の移ろいを感じながら活かしています。



「一位の生花」

花材 一位 晒木
花器 方形陶鉢

阪本 慶純 家元補佐 大阪

四季折々の花にふれ季節を感じ自然の美しさに心がいやされる。無心になって花に向き合う幸せ、花を通して自分の思いが表現できた時の喜び、そして人との出会いを大切に、何かを伝えられるよう精進して行きたい。

井内 慶君 総華監 大阪

花との関係を深めたいと桑原専慶流に入り数十年。花と人の和を結びたいと楽習会に入門。何か好きなお花ありますかと素子先生に問われ何も考えずカーネーションと答えてしまった事。今回の花展は素子先生を偲ぶ年でもあるようです。

廻戸 慶節 華監 大阪

花には自分と向き合える、いろいろな表情がありますね。ほっと心を和ませてくれる一時、又心を癒してくれる至福の一時、花のやさしさに感謝し、「ありがとう」の心をこめて楽しんで生けていきたいですね。

川島 慶理 華監 京都

お花に触れていると気持ちちが和らぎ、集中力が増し、パワーをもらっているような気がします。花の香りや色、季節感などを感じて、木との取り合わせやそれぞれのバランスを考えるのは、とても楽しいひとときです。

「生花 親子鶴」

花材 柏槇

葉蘭

柘榴（実）

小菊

花器 白竹鶴首三筒

山本 松風 家元参事 岡山

鶴首三管は雄雌子供の三羽を三管の花器を意味し、花器に合わせて材料は雄は立体で力強さを表現し控え流しに活け、雌は傾斜で柔らかさを急流しとし、子供は中心に子沢山で垂体で破手流しとす。又本手と逆手を活け違えています。

今井 敏芳 師範 岡山

桑原専慶流いけばな展、花を詠むに出品出来て本当にうれしいです。私は親子鶴の子の花入れに、ビヤクシンとザクロを入れさせてもらいました。親子の情が美しく力強く、活ける事が出来有難く思っております。

渡辺 玉壺 師範理事 岡山

生花の古い活け方の親子鶴は、横三管のバランスに注意していました。今回「花を詠む」に出品させていただきました。人・花・心すべてにお勉強になりました。心より感謝いたしております。ありがとうございました。





「山錦木の生花」
やましきぎ

花材 山錦木
仙翁 吹上菊
花器 祥瑞陶花器

小寺 慶枝 家元補佐 兵庫

秋の山を彩る錦木を、華やかに、そして優雅に生けてみました。花の美しさは、そのものの持つ味、それはやさしさであり、人々に、うるおいと、生きる喜びを与えてくれる 最高のものだと思えます。

安達 慶令 総目代 兵庫

十八才から始めた生花。子供が生まれ離れていた時に、素子先生からお電話を頂き再び教室に戻り、四十年近い年月がたちました。好きな生花を今も続けられることを嬉しく思っています。

白崎 慶穂 目代 兵庫

晩秋の枯蓮の立花私の一番好きな花材である。まだまだ手の届かない存在ですが我流派を誇りに思う。一本の花材を手にし眺めそこにはかない流れや反り、登り、ひねりそれらを最大に生かす「わぎ」を目ざして精進していきたい。



「瀬戸内霜月」

花材 老爺柿 松 晒木
大菊 小菊三種
花器 陶大鉢

井上 玉溪 家元参事 岡山

過日、本を読んでいますと中唐期の柳宗元の詩に「秋気南朔に集い独り遊ぶ亭午の時」とあります。この良い季節にお家元の花展が開催され私達も参加させて頂く事になり、秋の風情が出せる様にと捻った実と菊香を思いうかべながら・・・

岡田 頼芳 師範理事 岡山

花展のお話があった時期は夏、今年の天候ではとても秋の花は考えられず、思案の毎日です。今まで野の枝、花を見つけ入れていた私は大変勉強になっています。心細い毎日ですが仲間達と良い作品になればと思っています。

小野 玉祥 師範理事 岡山

活け花の本場の京都で花展に出品させて頂いたき有難うございます。花材は私共の山や庭木から得た物で松と老爺柿と菊を組み合わせてみました。ご笑覧の上今後共、ご指導賜りますようお願い申し上げます。



「小豆梨の生花」

花材 小豆梨（実）
花器 陶大鉢

杉浦 慶弥 家元補佐 愛知

大自然の生命力と恵みのほんの一部を、自分と重ね合せて活け上げてゆくいけばな。自分の心の大きさ・深さ・清らかさがいけばなの品格を決めてゆくのでは・・・常に稽古と自分磨きを両輪にする事を忘れてはならないと思う。

中西 慶文 総華監 愛知

井上 慶則 華監 京都

「玄関にお花を飾りたい。」私の生け花のスタートでした。花の「姿」「形」をよく見て生ける。新しい発見の連続でした。見る人の心を和ませ、豊かにしてくれる生け花、これからも、私なりのペースで続けていきたいです。

鹿目 慶明 師範 京都



「藪山査子」

花材 藪山査子

薔薇二種

花器 碧釉陶花器

（竹内真三郎作）

平松 栄泉 家元参事 岡山

お花それぞれに特徴があり、それに触れるたびに驚きであったり喜びであったりまだ勉強が足りないあと反省しながら生けさせて頂いています。まだまだ出会って無いお花がたくさんあるので楽しみです。

中務 知泉 家元参事 岡山

お茶には一期一会という言葉聞きますが、お花にも、いつもそういう思いで活けています。花達が一番輝いて観てもらえる様に手助けできれば、私は一番嬉しいです。

阿部 篁泉 総務 岡山

花を活ける。花の前に座ると心が和む。写経を書くときと同じ気持ちだ。花も水盤の中に一本一本始めから決められていたかの様にその位置にさされて何と美しいことだろう。いつ迄も花を愛し向上して行きたいものです。



「生花 躑躅」

花材 躑躅

椿

花器 陶花器

(近藤豊作)

伊藤 慶美 家元補佐 愛知

私が中学生の時、先生とお家元に行きました。迎え花の水仙の美しさに驚きました。凛として、身の引き締まる思い、それでいて見つめていたい花でした。そんな花が活けられるようになりたいものです。

大野 慶京 師範 愛知

夏に、京都のある店先に、檜扇の生花が飾られていました。いつか教室でお稽古したことがあり、アッこれだ！と思いました。その凛とした姿に、しばし暑さを忘れて見入ってしまいました。この力、授かりたいものです。

千田 慶真 師範 愛知

五十五年程前、戦前東洋一と云われた名古屋東山植物園の温室で初めて極楽鳥花 ジンジャーの花に出会い、花の色彩、香りが好きになりました。今、四季折々の花や木々にふれる毎月のお稽古がとても楽しく又、花が愛しいです。



「生花 三重いけ」

花材 檜

椿

花器 三重切竹筒

中原 翠浦 師範幹事 岡山

秋も深まり辺りの木々は秋の装いに変わりつつある。そのわきで静かにずっと変わる事なく緑を守り続けている槇に、想いを寄せながら。生花を活けてみました。

森永 芳月 師範理事 岡山

素朴な花を表現し、そして正しくきまり事を守り、極め付けの生花の美を礼儀正しく活ける。花と花器、生ける人の力が入ります。一年中稽古の出来る花で幸を感じています。

中桐 智芳 師範 岡山

人生の半ばに病を得、寝たきりに近い療養を続けていました。回復期に再び生花を始め、惹かれたのは約束事を守り生けられる端正な姿です。私の生き方を導いてくれている気がします。



「飯桐」

花材 飯桐

當麻菊

花器 陶花器

(竹内真三郎作)

武立 慶悦 総目代 滋賀

赤木 慶希 総目代 大阪

「花つておもしろい」これが始まり。続いているのもこの思い。花から広がりをみせた世界はこれまた面白い経験の機会を運んできた。次は何？今花と向きあっていられる日常を幸せに思い、感謝の意をこめて花詠みです。

塚本 慶陽 総華監 京都

いけばなを始めて二十四年がたちました。「花を詠む」境地には残念ながら至っておりませんが、今までの私の人生に関わって下さった方々、花材等々、すべての方々に感謝の想いをお伝えしたいと思います。

船本 慶香 華監 京都

命ある草花、その命を摘み、生けさせていただくのだから、毎日大切にお世話してあげないと・・・そんなお家元の生け花への姿勢をいつも心に念じてお花と向き合いたいと思っております。



「生花 椿」

花材 白玉椿

花器 手付銅花器

足立 慶英 総目代 京都

花が好き。葉も実も木も大好き。その中の椿を生けるのは、今回初めての挑戦である。どんな枝ぶりなのだろう？ワクワクさせる。いけばなって難しい。でも、同時に楽しく充実した時間もプレゼントしてくれそうですよね！

鈴木 慶由 華監 京都

十年程前、早春の京都駅の花展で、椿と柳のお生花の美しさに感激しました。これが私と流派との出会いでした。季節の移り変わりをいけばなとして表現する喜びは私の人生を変えました。その椿をいけられて幸せです。

片岡 慶聡 師範 東京

とやかへる たかの尾山の玉椿 霜をば経とも 色はかはらし 静かに花に向かい、いにしえ人々を思います。 誰に見られることを知らず、永久の命の幸を花は称えます。 その命に心から感謝いたします。



「枝垂紅葉」

花材 枝垂紅葉

水仙

紅花大文字草

花器 陶花器

(加藤孝誠作)

中村 慶典 総目代 京都

日頃、あちらこちらで木々や花や草花に出合いますと気持ちがあつと、和みます。家の中、職場、お店など様々なところで感じてもらいたいという思いでお花を活けております。

中村 慶松 目代 京都

いけた花の世話をしていると、穏やかな優しい気持ちになつている自分に気づきます。これからも花と共に。

岡本 慶靱 華監 京都

此の度の流展の成功、誠におめでとうございます。京展以来、前夜の活気あふれる会場に参加させていただき、お役にはたちませんでした。身引き締まる思いがしました。改めて華道の門をくぐらせていただいたお家元に感謝しております。

浅井 慶知 師範 京都

美的なセンスがなく芸術関係は敬遠していた私ですが、流派のテキストを拝見し、こんな花をいけてみたいと思いました。お稽古では悪戦苦闘しておりますが、子供には「楽しそうにお稽古行っている。」と言われています。

「蔓梅擬の生花」

花材 蔓梅擬

糸菊

花器 天目釉大鉢

(木村盛康作)

石田 慶知 総目代 徳島

職場で当流のお花を習い始め、現在は鳴門の家元講座でお生花の御指導を受けています。長い間お花から元気をもらい人生を豊かにする事ができました。

筒井 慶敏 総目代 徳島

桑原専慶流の生け花との出会いは、高校生の頃でした。お花から遠ざかっていた時期もありましたが、生け花の魅力にひかれ、再度お稽古を続けています。今回出品する機会を与えていただいたことに感謝しています。

池田 慶裕 総目代 徳島

初の流展参加です。大好きな花と花を通じて知れた人達は、掛け替えの無いものです。今後も人との繋がりを大切に新鮮な気持ちで続けて行ければと思っています。桑原専慶流のいけ花に出会えた事に感謝です。





「畔」

- 花材 猫柳 藪椿
- 花器 大谷焼陶鉢
- 花材 枯蓮 杜若
- 花器 大谷焼陶水盤
- 花材 雪柳 小菊
- 花器 大谷焼陶水盤

(矢野順三郎作)

(矢野款一作)

(矢野款一作)

木村 慶澄 総目代 滋賀

琵琶湖の湖面は、空の色を映して刻々と変化し見飽きることがありません。そんな湖畔の景色を感じる花をいけたいと思っています。

瀬津 慶房 総目代 滋賀

いけ花との出会いは、義父(慶定)との出会いでもありました。厳しい父でしたがいけばなの事となると親切でやさしい人でした。嬉しい時、悲しい時、苦しい時、いけばなと向かい合っていると気持ちが落ち着き、なごやかになります。

中塚 慶佳 総目代 滋賀

湖畔に枝垂れる柳のたおやかさ、湖面に広がる枯れ蓮のはかない力

強さ。四季ごとに表情を変える雪柳の優しさ。心の中で大切にしている水辺の情景と花の美しさを、生け花の中に映し出したいと思い生け込みました。

川喜多 慶美 目代 滋賀

私は花が好きで、手に取り眺めているだけで心が落ち着きます。この花がどの様にすれば今以上美しく見えるかを、いつも考えるのですが、実際はそうではないかも、それでも私にとっては、楽しい時間です。

中井 慶貞 目代 滋賀

私がいけばなを始めたのは十代半ば頃。今は亡き瀬津慶定先生にご指導頂いて、お家元の新年会や花展の席にチヨロチヨロ付いて寄せてもらっていたのを思い出します。あの頃にもつときばって習っておけば良かったのにと後悔しながら現在真野会で研鑽中です。

竹原 慶順 目代 滋賀

愛情をかけられ大切に生けられた花は、そのお返しに見る人に心地良さを必ず返してくれると私は思う。伸びやかに繊細に、あたかも自然の1ページの様な空気感をもった作品になって欲しいと願っています。

中谷 慶華 総華監 滋賀

花の美しさや力強さを、自然にあるがままの姿で、花器に映していきたくていつとも鉢を持ちます。心が洗われ、優しい気持ちになれる。生き生きとした花を生けられるよう、技術も心も磨いていきたいと思っています。

仲岸 慶有 華監 滋賀

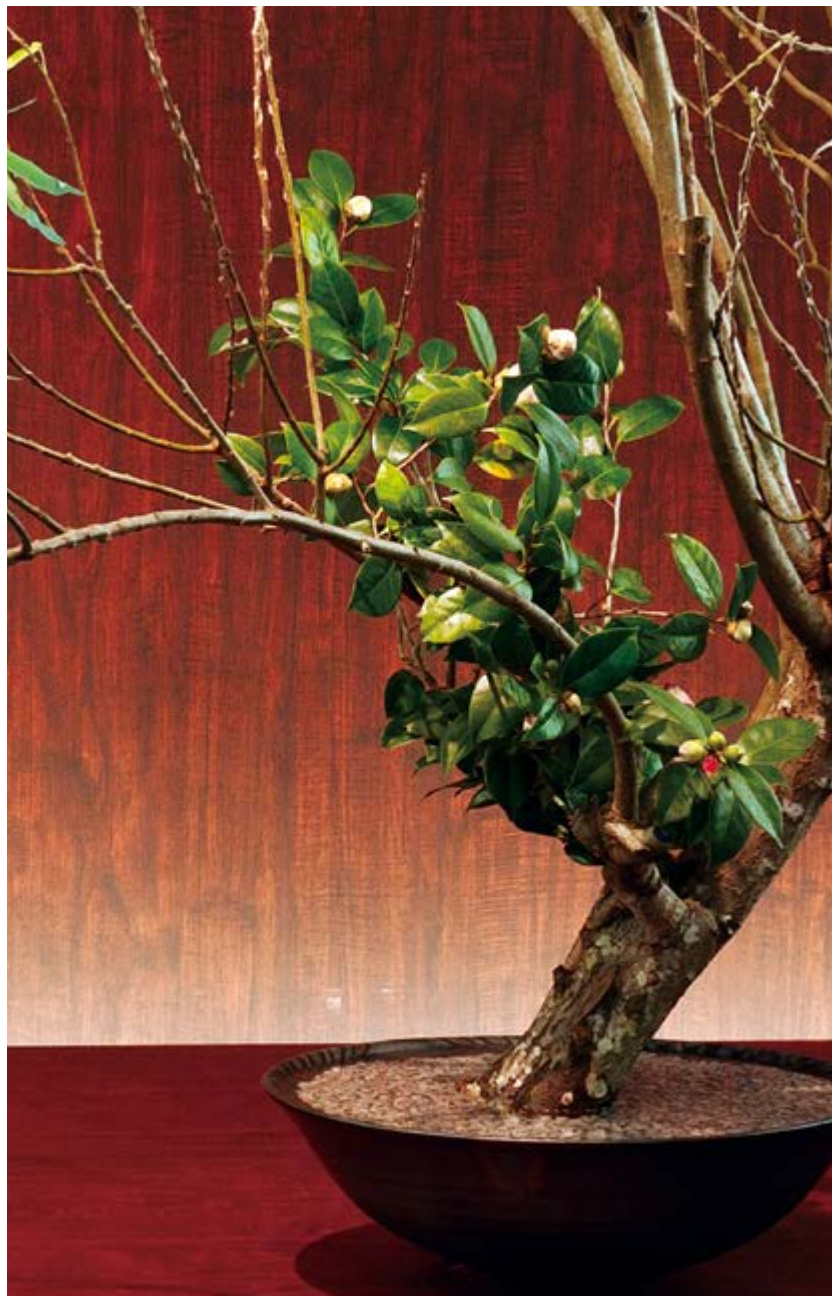
比叡や比良を仰ぎ、びわ湖を眺めていると自然に穏やかな気持ちになります。1本の花をどうしようかと迷う時、この滋賀の豊かな自然に想いを寄せます。人々の心を和ませるような生け花でありたいと願っています。

竹原 慶巖 華監 滋賀

季節を感じ自然美を生かして入り込みたくなる様な空間ができたと思います。生け花を通じて心が癒され自分を感じる事が嬉しい。花から愛される様努力したい。

下村 慶哲 師範 滋賀

日常の生活で触れることの少ない自然の景色を、限られた空間ではあるが生け花を通して触れる機会があると私は感じています。皆さんにも、この小さな自然を楽しんでいただければと思います。





「黒」花材／スペクタビリス（黒い蘭） 紫小町（紫の蘭）
カラー 花器／金彩舟形陶花器



「舞」花材／蘭 トルコ桔梗
花器／金耳陶水盤（柳 原睦夫作）



「波」花材／アンスリウムの花と葉
花器／金彩ガラ ス花器



「まめ」花材／豌豆 薊 花器／螺鈿朱塗花器



「黄色い葉」花材／美男葛 桔梗
花器／面取陶水 盤（河井透作）



「紅い葉」花材／岡虎ノ尾の紅葉 秋明菊
花器／耳付陶花器（宇野仁松作）

「花を詠む」会場入口の小品（右列前期、左列後期）



「彩り香る」

花材 菊数種

花器 かいらぎ釉水盤

（木村盛伸作）

松本 慶季 総華監 京都

流展に出展する事で、習い始めた頃、師範の免許を取得した時の事を思い出しました。花は人の心を和やかに、なごむ素晴らしいものです。花を通して子供たちに何かを伝えられればと思っています。

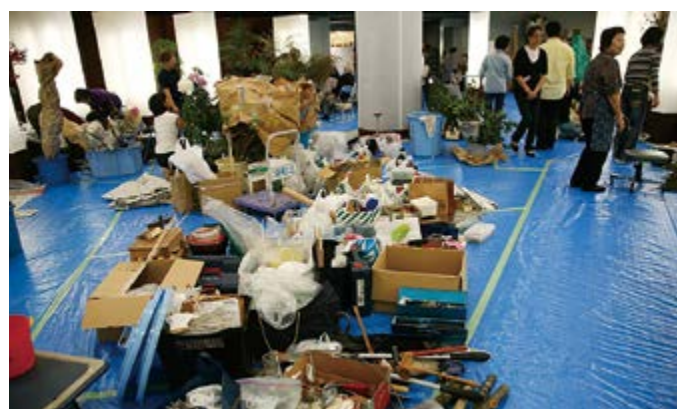
西田 慶詔 華監 京都

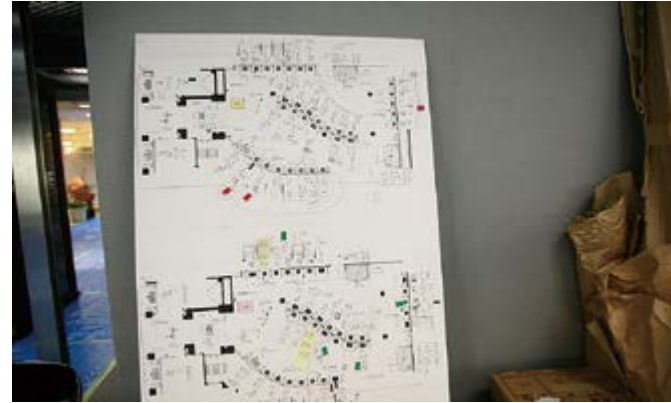
私と生花との出会いは高校に入学した時に近所で教えておられた大木先生にお世話になりました。結婚してから随分ブランクがありましたが、又今杉浦先生にお世話になってます。この度の花展に出展させていただき感謝しています。

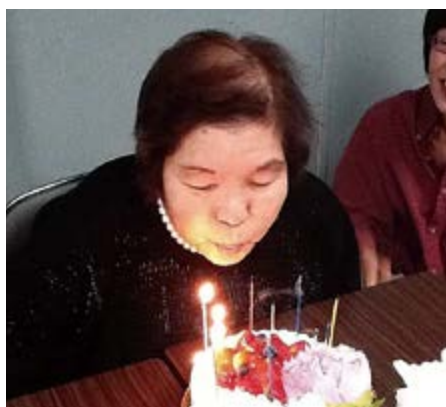
吉住 慶潤 華監 京都

庭の花を綺麗にいける義母をみて、私も！と思い、義母より教わりました桑原専慶流のいけばな。義母と私をつなぐ基でした。義母の思いも込めて一生懸命花と向き合いたいと思っています。









花を集めてくれる人がいて私のいけばなは成り立っている。
今回のいけばな展でも見事な花材が集まった。

花屋の心意気が嬉しくて、それになんとか応えようと無我夢中で花をいけた。

花を育てる人。

情熱をそいで集めてくれる人。

花の器をつくる人。

そして花をいける私たち。

飾らしたいけばなはそんな人達と花とのコラボレーションから生まれる。

そしてその花がまた人を幸せにする。

いけばなって凄いと思う。

世の中は東日本大震災と原発事故を経験し、その試練は社会に過去の反省と、より強い連帯を求めている。

私たちのいけばなはこれからの日本の復興に大きな役割を果たすときがくると思う。

心のこもったいけばなは、人の心を和ませる。

季節を感じ、自然の潤いに癒される。

器いっぱいの水に谷川の澄んだ空気を、花と花の間合いに微笑ましい植物の会話を想像する。

いけばなが人の心と心をつないでくれる。

美しいと感じる心が温かな「和」をつくる。

私たちは、いけばなの力を信じている。

後期展「現代調」



花材 ガイミアリリー

ティランジア

枯アナナス

花器 波文陶花器

(矢野祐志作)

桑原 仙齋

花フジさんが「ガイミアリリーが入りましたよ」と電話してきてくれた。会の二十日ぐらい前、まだ蕾は固い。花フジさんが温度調節を小まめにやってくれたお蔭で、

後期の初日にはこんなに見事に咲いてくれた。

とり合わせたのはティランジア (Tillandsia)。根がなく木にぶら下がって生育する南米の乾燥地帯の

植物である。日本でも「エアープランツ」という通称で小型種が売られている。空中の湿気を葉で吸収するのである。だからこのいけ

した。そえた枯アナナスも同じパインアップル科の植物。

ばなのティランジアも天井から吊



「薔薇の生花」

花材 薔薇

薔薇の実

花器 陶花器

(森野泰明作)

桑原 仙溪

父が鉄線を別の枝にからませて生花にしているのからヒントをもらって、苔木を骨組みにして蔓薔薇の生花を華道京展に出品したことがある。それ以来、薔薇の生花をときどきいけている。

この薔薇は生産者のこだわりで、特別に遅しく育てられたそうで、かなり長く使っているが会期中は言うに及ばず、花展のあとでも家で一週間以上綺麗だった。

写真では見えないが、控の枝先はほとんどU字に曲がっていた。花席は横からも見る事ができたので気づいてもらえたかな。

いけばなは後ろ側から見ると、花の別の表情に出会える。

お帰りの際に会場の余韻とともに、また違った一面を感じていただけたらとうか。

この花器は父が大好きで度々使っている。縞模様が薔薇の幹のようにも見えてくる。





「出会い」

花材 クリプタンサス三種
アンスリューム
晒木
花器 縞文陶花器
(伯耆正一作)

桑原櫻子

大きな花展があると、初めて出会う植物がある。

見たこともないような形、いろ、その姿。どの様な木や花や器と取り合わせるかによってもその雰囲気は全く違ってくる。

大阪池田の温室で見つけた奇妙な葉っぱ、クリプタンサス。縞模様で羽根の様な形をしていた。同じく変な花のカタチのアンスリューム。苔木に絡ませていけてみたいと思った。器は苔木の重さもしっかりと支えて花の強さに負けない。

私と花と器の出会い。



「ターキツシュ」

花材 サンスベリア
里芋科の葉
胡蝶蘭
花器 碧釉陶花器
(竹内真三郎作)

桑原慶華

竹内真三郎先生のおつくりになる花器はとにかく花がいけやすい。そしていけた花と器がピッタリと合うことがほとんどだ。

この私のいけたサンスベリアの枝は初めていけたがとてもやかいな花材だった。ぐにやぐにやでだらりと垂れ下がる。でもこのブルーのどつしりした器にはピタッと止まってくれた。なにかきつと、器におまじないがしてあるにちがいない。あ、そうだ。奥様の竹内慶陶先生への愛情が器にこめられているから、いける人にも、花にも優しい器なんだ。花をいけていると、陶芸の魅力を再発見する楽しみがある。



「木麻黄の島」
もくまおう

花材 木麻黄の根
バンダ

里芋科の葉

花器 筒型陶花瓶

(河合誓徳作)

桑原素溪

選んだ木麻黄の根、バンダ。そして黒い陶の花瓶。どんな形に仕上がるのかなと思っていたら、木麻黄の根の空き間に長い花瓶をはさみこんでバンダをいけて仕上がりました。かと思っていたら、葉先の枯れた里芋科の葉をそえた。
健一郎が花フジさんに頼んで会場に持ってきてもらっていたらしい。よく合っている。(仙齋記)

「葉鏡」

花材 金属の葉

ガーベラ

ペゴニア

ブラックウィロー

花器 黒釉銀彩方形花器

(前川俊一作)

桑原慶寅

順之助(慶寅)が来ている筈なのに、えらく静かだと思っていたら、ブラックウィローに銀の木の葉をつけていた。櫻さんが横で見ていた。

会場では白いガーベラをとり合わせ、赤く色づいたペゴニアの葉をそえていけ上がり。

花器に配色された金色銀色とよく似合った静かな一瓶である。

(仙齋記)





「あかり」

花材 アマリリス
デフエンバキア
ミニカトレア
花器 耳付緑釉陶花器
(宇野仁松作)

原 遊泉 花叟 岡山

平成二十年、第十四世家元の仙齋先生から「花叟」という許状を拝受した祝賀の席で、多賀屋夙生先生の狂言「蝸牛」は思い出に残っています。
喜寿を少し過ぎた今、第十五世家元主催のいけばな展に出品できる事の幸せをかみしめています。



「蛇の目松」

花材 蛇の目松
薔薇二種
花器 耳付淡緑釉陶花器
(宇野仁松作)

小野 静泉 華老 岡山

華道家には年令があるのだろうか？常に花と出会うと感動とときめきがあります。
時を忘れて花と語り続ける日々。
繰り返す季節の中に一期一会の気持ちを含めて、出会う人、花と楽しみ、いつの年にも若者と、同じ花をいけ続けたいと思っています。



「クレマチス」

花材 ランブータン

クレマチス数種

アンズリウムの葉

アスパラガス

花器 濃紫釉陶花器

(宇野仁松作)

濱村 慶章 家元補佐 兵庫

長い生花との時間の中で若い人達
の間に合流させていただき嬉しく
思っております。この会では美し
い色彩に重点を置きシャレた作品
にしたい皆様から喜んでいただけ
たらと期待しております。

阪田 慶寿 家元補佐 東京

花のあるくらしは心を豊かにして
くれるものです。この度の花展
では特に自然の美しさを失わず見
飽きのしない、いつまでも心に残
る作品のイメージで活けてみまし
た。

中山 慶泉 華監 兵庫

花の匂いがたちこめる会場で、汗
だくになりながら生け込みをした
のが良い思い出です。
ひとつの作品を作る過程を楽しま
せていただきました。
どうもありがとうございました。



「ネオレゲリア」

花材 ネオレゲリア

ストレリチア・ジャン

セア 蘭

花器 トルコブルー水盤

山本 竹泉 家元補佐 岡山

私は子供の頃から花が好きで、そ
の好きな花を仕事として今日まで
歩んで来れたことをとても幸せに
思っています。花は心を豊かにし
生活に潤いを与えてくれました。
良き師、良き仲間にも恵まれて、
これからも共に楽しみたいと思っ
ています。

大本 都泉 総務 岡山

花の持つ力は、私の大きなエネ
ルギーとなっています。お花は大切
な存在です。私の作品を通して、
その力を他の人に伝えられたらと
願い、日々精進しています。今回
の作品では、爽やかな力強さを感
じてほしいです。

三宅 和泉 総務 岡山

春の魁けの梅・桜・桃と四季の花
に囲まれて過ごし、野山に咲く花
里や都会の花は私の心を豊かにし
てくれます。そして、今、新しい
花に出合い「いけばな」として
手元で活けることに幸せを感じて
います。

「^{にれ}榆」

花材 榆の根 アマリリス
アンズリウムの葉
大輪オンシジューム
花器 トルコブルー陶鉢
(宇野仁松作)

川合 慶陽 家元補佐 京都
素子先生は生涯花を愛し、人を愛し、ご家族をこよなく愛されました。仙齋先生はじめお家元ご家族の御活躍をきっと喜んでおられることと思います。ね、先生。

川瀬 慶裕 家元補佐 京都
十三世家元に入門して以来、その気品ある生け花を観て基礎を学び、仙齋素子ご夫妻に美しくのびやかな花の指導を受け、仙溪、櫻子ご夫妻に、仙齋先生と机を並べて批評を受けるしなやかなこの流派にハマってます。

惣司 慶寛 総目代 京都
流展のご成功をお祝いさせていただくと共に、出品させて頂けた事に感謝申し上げます。
入門時の緊張、今までの花展の事、素子先生との楽しかった事、思い出させていただきました。今後益々の御流派のご発展を心よりお祈り申し上げます。

新井 慶珠 総目代 京都
素子先生に長い間個人教授をしていただいた。花の好きな私のために、いつも丁寧に残り花まで家のあちこちに付けて下さった。赤い花を見ると、先生の笑顔を思い出します。

「アガベ」

花材 アガベ「笹の雪」
ネリネ二色
ダイヤモンドリリー
フィロデンドロン
花器 エメラルドグリーン陶花器

室山 粹声 家元補佐 岡山
花は人の心をひきつけ癒される。花を愛することによって多忙な生活の中に美しい彩りを添えてくれます。花展を通じて諸先生方との出会い、花とのふれ合い、作品の出来あがりを見て花詠しました。

石井 清月 家元参事 岡山
十代から花と触れ合い、四季の花、木がそれぞれに生き生きと主張できる様、心を込め、技を磨き、精進努力しています。御家元の御指導の許での花会、感激です。皆様の作品を拝見し勉強させて頂きたいです。

白石 美芳 師範幹事 岡山
物事を習得する段階を三つに分けた「守破離」という言葉があります。「守」とは学びの段階。「破」とは個性を想像する段階。「離」とは新しい独自の道を確立させる段階。私も将来に向け精進して行きたいと思います。





「翔」

花材 ストレリチア

蔓梅擬

胡蝶蘭

ミリオクラダス

花器 陶花器

宮原 仁恵 家元補佐 岡山

生花の材料が手短に手に入った若い頃、仲間達と語りあかしながら腕を磨き合った。よい環境で恵まれた花人生。集大成として今回京都に参加出来る事に感謝しています。若返り妙薬の一番！現代花に挑戦してみました。

石井 真正 家元補佐 岡山

久しぶりの京都（大丸）での花展です。わたしは宮原先生、わたしの社中である田村さんの三人一組の現代花の出展です。秋も深まり木々も紅葉の季節を器の上に表現してみたいと思います。よろしくお願致します。

田村 悦華 師範 岡山

四十歳を過ぎ、桑原専慶流の花に出会い母娘で勉強させて頂いています。時には娘といけばなの話に花を咲かせ娘からアドバイスをもたらえる事もあります。今回は大舞台に参加でき、感謝と共に会場の多くの力作に出会い、勉強になりました。



「藻玉蔓」

花材 藻玉蔓の実

山芍薬の実

ルビーグラス

フィロデンドロン

満天星

花器 竹籠二種

（八長齋小菅製）

小菅 慶節 家元補佐 京都

十三世十四世十五世家元に三代に亘り師事し、花に関する事は言うに及ばずあらゆる事を教えていただきました。三十有余年の自分の生け花に対しての思いや取り組みの集大成として今回の流展に出瓶致します。

今井 慶孝 総目代 京都

道と名のつく稽古ごとには終着駅がなくやっかいです。私も半世紀近くをこの道で迷い続けています。今回も新しい出会いに、不安を感じながらワクワクしています。

今村 慶悟 総目代 京都

ドウダンツツジがクーラーの風にあたり、朝来てみると葉が縮み、家元の指導によりいけ直すことが出来ホッとしました。大勢のお客様に見ていただき感動しました。家元による光の照明や音楽も大変よかったです。皆様の力の結集で素晴らしい花会ができました。



「Sou（奏）」

花材 白樺

大輪タリア数種

花器 陶花器 陶製チェロ
（白石正子作）

宮本 京泉 家元補佐 岡山

タイトルの大きさに驚きながら、自分なりに咀嚼し、大自然に生かされている事、聞こえてくる音に癒されている事、美しい物を見て感動する事、人間の五感に感じる心地良いものの一瞬をとらえて表現しました。

石井 慶月 家元補佐 岡山

メンバー十人と出会い、焼き物作家のチェロと出会い、釧路湿原からの白樺と出会い、ワクワクしてきました。静かな森と湖のある素敵な場所でのチェロの奏でる音楽を聴きながら、優雅な世界の一時を想像し表現してみました。

柚木 芳艶 家元補佐 岡山

古都京都にて、十人の仲間と楽しく作品を創りあげるこの場に私も同席出来る事は、この上ない喜びです。完成した作品の前で共に感動し、拍手できる事は夢の様です。自分誌の二ページに加えられる事

に感謝です。

赤沢 作豊 家元参事 岡山

桑原専慶流の花をいけ始めて五十五年の年月がたち、花をいける喜びを感じます。流展は三回目です。いけるたびに花材、形が変わり芸術的な花。十年二十年当流のいけばながどのように芸術的な花の行く姿が思い浮かびます。

太田 博泉 師範理事 岡山

初めての京都でのいけこみ、特別大作という事もあり不安も一杯でしたが、今までにない経験を、色々と勉強させていただきたいと思っています。

甲斐 幸泉 家元参事 岡山

キャリアも年令も異なる先生方とグループを組み、大きな作品にチャレンジする機会を得て、お互いに協力し合いチームで作り上げる喜びを共有し「生け花の美学」に挑戦する勇気を花との対話の中で楽しみつづけました。

福武 靖風 師範理事 岡山

大作とグループいけに参加する事は初めてのことで喜びと不安でいっぱいです。数回の打ち合わせ、

いけ込みでの勉強と経験をさせて頂きました。いつの時も花と心を通わせることが出来る様に精進して行きたいと思っています。

三宅 千華 師範理事 岡山

今回十人で活ける大作に参加させていただく事になり、様々な楽器で音楽を紡ぐ奏者のように、自分の役割を果たせたらと思っています。先生方のお花に対する想い、アイディア等を勉強させていただき感謝しています。

光岡 典泉 師範 岡山

北海道から届いた白樺の大きさと多さにびっくり。花器の美しいブルーに感動があり、自分の姿が正直に写る鏡に身を正し、大輪のタリアに心躍らせ、人・花・物が一体となった作品のお手伝いに参加出来感謝しています。

山本 康月 師範 岡山

昨年師範のお免状を戴いたばかりで、思いがけず京都の流展に参加できる事になり、誇りに感じると同時に身の引き締まる思いです。作品のイメージが具体化し、森に吹く風や流れる調べまでも感じていただければと思います。





「南の島から」

花材 アナナス・ビルバージア

アナナス・アルセンシス

レッドパウアウ

ファイアーボール

ネオレゲリア・イエロー

ゼブラ

アンスリウム（白）

花器 彩泥陶花器五つ

（宮下善爾作）

高橋 慶嘉 華監 京都

いけるお花は年と共に変化しているように思いますが、お花にはひとの心を和ませたり、安らぎや活力を与えたりと様々な力が備わっていると思います。見る人にもお花の力によっていつも笑顔でいられればと思います。

稗田 慶智 華監 京都

花は、一輪でも素敵に見えますが、たくさんあれば、お互いを引き立てあい、より美しさを増します。私達も花の様に、十人の持てる力を出し合い、協力し素敵な作品にしたいと思っています。

横田 慶重 家元補佐 京都

幼いころ、母がよく庭の片隅に咲いている小さなお花を一輪挿しに入れて、こんな可愛いのが咲いていたよと飾ってくれました。庭に咲く四季折々の花を愛で、豊かな大自然の中で育った私を、お花大好き人間にしてくれました。

藤本 慶隆 総目代 京都

山田 慶克 華監 京都

大震災・大型台風と自然の猛威には恐怖を感じます。けれども、風に吹かれ寄り添う草花には、心癒されます。これもまた自然の恵みです。四季折々に咲き誇る草花に私も寄り添い、さりげなく毎日を過ごしていきます。

時、とても嬉しく充実感に満たされます。

東中川 慶智 華監 京都

今回初めて流展に参加する事になり身が引き締まる思いです。普段から自分自身が楽しく生けるようにと思っていますが、この流展を見に来られた方々にも楽しいと思ってもらえるように頑張りたいと思っています。

山本 慶紀 師範 京都

生け花を見ると心が和む年頃になりました。花はもちろん、枝の配置と想像力により限りある空間に無限の可能性を感じるとき、私の心も解放されていきます。とはいえ、もつとちゃんとお稽古した方がいいと思います。

家坂 慶真 師範 東京

私にとつての「いけばな」とは、「四季を感じられる場所」「自然の美しさや空間の美しさを学べる場所」「自分自身と向きあえる場所」である。いけばなをとおして、心の豊かさを磨いていきたい。

高楠 慶幸 華監 京都

日常の生活にお花があると心が豊かになります。花と向き合う時、集中し、時に無になります。難しさを感じ奥深さを知ります。いけ終わり、お花が生き生きと輝いた





「樹霊」

花材 流木

アンズリウム

胡蝶蘭

モンステラ

花器 方形陶花器

原 誠泉 家元補佐 岡山

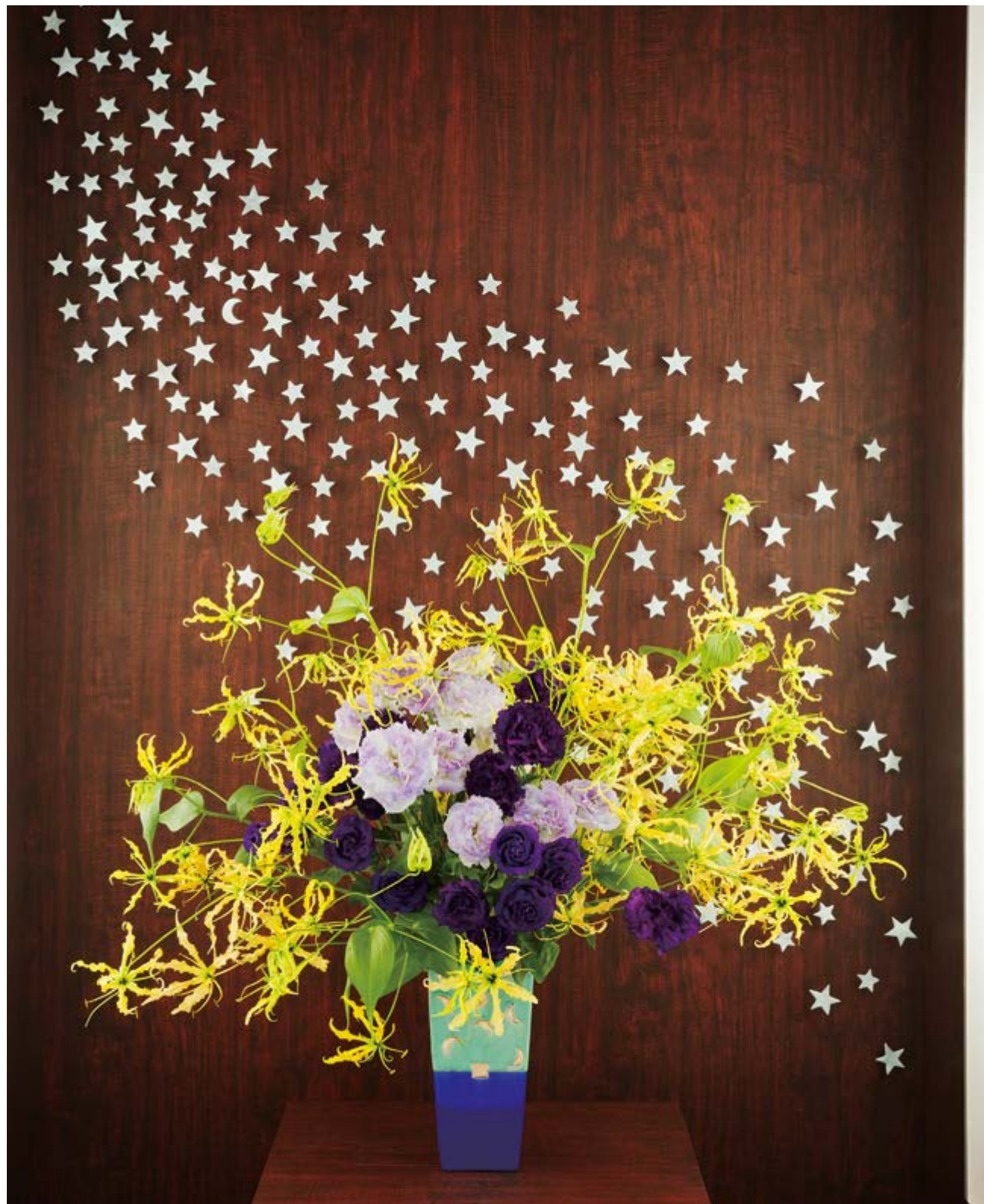
何気なく浮かんで来るのは自然の風景。それからどうフォーカスするか、其処からもう一つ踏み込んでイメージをとらえたい。ディスプレイする場の空気との調和。多くのことが頭の中に巡る。一番に目に映ったのが「白」。

原 映泉 家元参事 岡山

イメージをキープしながら二ヶ月。どうそれを表現、活けるか試行錯誤。最後の詰めがもう一つ決まらないうまま見切り発車。目先ばかりに気を取られ、今迄と同じ事をやってしまったかな。精一杯頑張っていました。

原 麗歩 師範 岡山

赤と緑のグラデーションのアンズリウム。白い胡蝶蘭。どちらも個性的な表情をもつ。どんな会場か、そこでどんな表情を見せてくれるかな。



「みんな空の下」

花材 グロリオサ（黄花）

トルコキキョウ二色

花器 金月文陶角瓶

土田 慶美 家元補佐 京都

佐藤 慶友 総華監 京都

生花を習い始めて早二十三年。花の声が聞こえるようになったかいまだわかりませんが、精一杯生けました。つらい時や悲しい時、星空に癒される事もあるでしょう。そんなことを願いながら生けました。

永井 慶真 華監 京都

いけばなを始めた頃は、流派のことも何となくわかりませんでした。が、すぐに桑原専慶流のお花が好きになりました。桑原専慶流でいけばなを始める事ができ、本当に良かったと思っています。



「秋色の舞」

花材 梅擬

リコリス（鍾馗水仙）

木苺（構苺）

花器 碧釉陶花器

（竹内真三郎作）

滝を流れ落ちる水の軌跡。そんなふうには花器を見ると、梅擬の赤い実は周りの秋の色を映しながら飛び散る水しぶきのようだ。

北川 慶緑 家元補佐 京都

中村 慶美 総目代 京都

花の宇宙の中の私。私の宇宙の中の花。多くもなく、少なくもなく。日々の生活の中で美しいハーモニイに出会えると、嬉しく、和み、心はずみ、広がる。

中井 慶里 総目代 京都

「黒とプラチナに」

花材 チューリップアンズリウム

枯紫陽花

斑入アロカシア

花器 銀彩陶花器

（森野泰明作）

森野泰明さんの器にいくると、花がモダンに見えてくる。オシヤレで洗練されていて、何より花との響き合いが独特で、同じ花材でも森野さんの花器にいくと数段輝いてくれる。そんな不思議な器。

清水 慶富 家元補佐 大阪

仙石 慶綾 家元補佐 京都

林 慶妙 家元補佐 京都

森本 慶明 総目代 京都



「旅人の木・絆」

花材 ビスマルキアノビリス

旅人の木（薔）

アンスリウム

百日紅のこぶ

花器 ワインレッド花器

渡辺 義風 家元補佐 岡山

華道を始めてかれこれ四十五年になります。区切りの年に流展をラ
ン展の仲間と一緒に出品出来ると
いう楽しさで浮き立っています。
これからの課題、いろんな方面か
らの観察、そして素直に受けとめ
られる心を養う気持です。

小野 京苑 家元補佐 岡山

夢と潤いの贈り物「旅人の木」が
見る人、いける人に元氣を与え、
復興を願う心を表現するには最適
かと。茎に溜まった水を飲み、又
歩き始める。そんな絵が見えて
きませんか？そんな場を与えて下
さった御家元に感謝！

尾崎 洋風 家元補佐 岡山

流展にはワクワクの楽しさがあり
ます。自己満足だけの「いけばな」
ではなく、会全体をいかに創りあ
げるか（壊さないようにするか）、
自分が巧く同化できるかなど、緊
張しますが快感です。出品できた
事に感謝します。

三宅 玉圓 家元参事 岡山

大作グループの一員として初めて
集合作業をしました。日頃の作品
と違い下準備が大変で様々な工夫
がたくさん盛り込まれています。
勉強になりました。皆で造り上げ
ることの喜びを体験し、参加して
良かったと思いました。

山本 香秋 師範幹事 岡山

若い方達に囲まれて、いけば花展に
出品できた事にまず感謝していま
す。ビスマルキアノビリスという
初めて拝見した花材との出会い。
私の背ほどある花器との遭遇は、
長く華道の道を歩んできてよかつ
たと思える瞬間でした。

古川 生藻 総務 岡山

お花を生ける事は私にとって生活
の一部になっています。仕事に疲
れていても、悩み事があっても、
かれこれ四十年近く師匠の所へ通
い続けています。これからも、こ
く自然に楽しく、お花と過ごせたら
ら・・・と願っています。

春名 仁風 総務 岡山

このような大きな華展に参加させ
ていただき感激しております。同
じ花とは二度と出合うことはな
く、その偶然の出会いを大切にし、
観て下さる人を幸せな気持ちにし
ることが出来る花を、いけていき
たいと思います。

「ウッドローズ」

花材 ウッドローズ

濃赤色ハイブリッドリリー

花器 黒黄陶扁壺

(柳原睦夫作)

宇野 民水 家元補佐 岡山

私のいけばなへの思い。花器と花

の調和、花と花の調和。どちらも生かすことは難しく日々が挑戦です。自然があるがままに活け、見て下さる人にやさしさと心温まる思いが伝えられると嬉しいのです。

小林 祥雲 家元参事 岡山

いけばななどの出会いは社会人一年生の春。生花の凛とした立ち姿に心ひかれて桑原専慶流に入門しました。巡り合うたくさんの方々の心

大切に扱い、いつでも花の飾つてある生活を楽しんでいきたいと願っています。

赤木 雅芳 家元補佐 岡山

季節ごとにいろいろな花と出会い、その素材を知りそして活ける花には感動、癒し、人々との繋がりを与えてくれます。出品出来る事に感謝しつつ、多くの方々的心に届きますように。



「インドの鶏頭」

花材 特大鶏頭 鶏頭紅葉

カラベラ

ミリオクラダス

花器 条文陶花器

(竹内真三郎作)

長尾 慶淑 家元補佐 京都

中学校のクラブで生け花に出合つて以来、ずいぶん長く続けてこれ

たと思います。花が好きだったのか。家のどこかに花があると、なごむ、やすらぐ、ほっとする。これからも続けていければと。

小寺 慶妙 家元補佐 大阪

庭に毎年夏になると「ハゼラン」が咲く。茎は細く枝分かれし、紅色の小花がとても「可愛い」。竹籠に、形にこだわらず遅咲きの桔梗と活けてみた。曲がった桔梗は私の思う様に向いてくれない。「花

も生き物」でも私は花が大好き。

片山 実己 家元補佐 京都

花を生けるという事を始めて、約三十年になりますが、花はその時の私の心をすべてわかってくれます。楽しい時にはすぐ水も上がります。不思議ですね。毎日楽しく生けたいと思います。





「アレカ椰子の生花」

花材 アレカ椰子

デンファレ

花器 カットガラス花器

風早 利葉 家元参事 岡山

「花に心あり、花に命あり、花は語る、我また花と語らん」この言葉を先輩から教わり、この度の現代調のお生花に迷いましたが、この言葉を心にとめて一生懸命に頑張りたいと思います。

佐藤 京扇 師範 岡山

五十の手習いで、お花を始めて八年。先生方からの良き指導を受けて、師範を頂くことが出来励みになりました。また色々と花展などにも出展し、いろいろ勉強させて頂きました。私の良い趣味となりました。

中田 江津華 師範理事 岡山

花には目には見えない力があり、生けた花を観て頂いた方に癒しや感動を与え、それが自身の喜びに通じていると思います。これから心を入れて花を生け、皆様に喜んで頂けるよう精進してまいります。



「箒木」

花材 箒木

ガーベラ数種

花器 フランス製陶鉢2つ

辻本 慶文 家元補佐 京都

父が生けてくれた可愛いお花は赤まんまでした。子供心に花にあこがれ娘の頃お裁縫を習いにゆき、桑原専慶流に出会って一生懸命習いました。お家元様はじめ大勢の人にお世話になり、お花をして人にも優しい気持ちになれます。私は幸せです。

山本 慶智 家元補佐 京都

田村 慶澄 総目代 京都
振り返ってみれば、お花を始めてから四十年近く経ちます。技術はともかくお家元先生、スクール仲間、家族の理解の全てに感謝しております。又、この様な素晴らしい花展に出品させて頂くことを心より喜んでおります。

辻垣 慶嘉 華監 京都



「燦陽」

花材 葡萄（蔓と実）
葡萄の幹

薔薇（アンダルシア）
花器 碧釉陶花器

中田 利華 師範理事 岡山

お花と向き合って生きている時間が大好きで今まで続けて参りました。岡山の葡萄と花びらのフリルがかわいいバラで、明るく弾む作品になりました。今後も花に魅了された人生を歩みたいですね。

吉田 真葉 師範幹事 岡山

今回、青年部として参加することになり、お家元、副家元をはじめ色々な先生方にお世話になり、難しい花材でしたが素晴らしい作品が出来ました。有り難うございました。今後も益々精進してまいります。

小川 玉裕 師範理事 岡山

まず青が綺麗な花器を決め、それに合う季節の花・色を考えました。それを元にお家元や櫻子先生と直々に相談・指導して頂き完成することが出来ました。このような貴重な経験をさせて頂けたことを感謝しています。

亀井 陽春 師範 岡山

これまで、諸先輩方が出版されてきた流展に初めて青年部として活かせることが出来、身が引き締まる思いです。今回は、岡山名産の葡萄を、若々しく表現しました。



「バンダの立花」

花材 バンダ 枯椰子
アロカシア

ユーホルビア
晒木 ミリオクラダス
花器 燻焼陶花器

（矢野款一作）

朝倉 慶佐 家元補佐 京都

気の合った三人で、それが作品にあらわれていると他流の人からおほめの言葉を沢山頂き、改めて心の絆がしっかり結ばれたように思います。又東京からの出瓶の方と同じ郷里で話に花が咲きなつかしく楽しく日々を過ごさせて頂き、題名にふさわしい流展でした。

北川 慶法 家元補佐 京都

桑原専慶流は代々のお家元が立花を今に伝えてこられた。その立花に流展で挑戦することになった。素子先生から「あなた達は三人で一人なのよ」といわれた言葉が頭の中に残っている。「三人寄れば文殊の知恵」知恵を出し合いのびのびとした明るい花を挿したい。

廣田 慶喜 家元補佐 京都

流展開催おめでとうございます。いけ花はいける人の鏡の様なもの。知らずに心が花に現れている様に思われます。常に心して驕ることなく師を敬い御指導の技を磨き人の心を和ませる花をと念じ、作品展に参加出来ることに感謝しています。



「観葉立花」

花材 バンダナス カトレア

斑入モンステラ こぶ

ティランジア ボート

花器 筐形陶花器

二井 慶博 家元補佐 京都

アフリカの地に人類誕生、すでに植物は自生していた。互に進化し現代に、その年代の植物が私達の花材の中にあるのでは？あるとすれば生命力の強さを感じる。人々は花を愛し又宇宙（未来）までも大きな花の輪が・・・

古賀 慶和 華監 滋賀

生け花は、私にとっていろんな花との出会いだけでなく、沢山の人達との出会いがあり、今では心の宝物です。今回の花展の出品は今までの花への思いを込め難しい立花に挑戦しました。一人ではないので心強いです。

豎山 慶伊 華監 滋賀

いつもご指導賜り有り難う存じます。この度の流展に参加させて頂けます事に感謝申し上げます。初めてで何もわかりませんが、皆様にご指導仰ぎながら、お勉強させて頂きたく存じます。

永田 慶悦 華監 滋賀

子供の頃、野に咲く花と遊び、一面風にそよぐ河原撫子の原っぱ、夏の夜明け凜として咲くお堀のハスの花を美しいと思った事。折々に花がくれたメッセージは、私が花に心を寄せるようになった原点だと思っている。

「樅」

花材 樅 アマリリス

花器 陶水盤（阪野鳳洋作）

成瀬 慶童 家元補佐 東京

どんなに心が疲れ、心が折れた時も花と向き合い、花を手にとったとたん、花がすべてを吸い取ってくれるのでしょうか。生けている時は無になり、そして生け終わった時の静けさ・・・何回花に助けてもらった事か。

岡村 慶雪 華監 東京

うまく生けられた瞬間の、花と自分の呼吸があったような、花と息が通じたような、そんな感覚がとても好きです。これからも、いけばなを通じて、花との対話を楽しみたいと思います。

中野 慶里 師範 東京

お華を通して得た出会いは大変貴重なものでした。勉強や仕事では得られなかった発見もあり、自然の力の偉大さ、また力強さを日々感じて癒されています。奥深く、でも楽しんで生活にも取り入れられるお華が大好きです！





「七竈」

花材 七竈

鶏頭

花器 銀織部陶花器

(柳原睦夫作)

金属花器

長谷川 慶紘 総目代 京都

時として移り変わる自然の花の命に改めて華道の奥深さを覚えました。お誘いした方々も一様に素晴らしい、センス抜群、あんな大作に挑戦出来るなんて・・・感動しました！と絶大な賞賛の言葉を頂きました。参加させて頂いたこと光栄に存じます。

後藤 慶節 総目代 京都

足早に季節が変わる日々、今年は

3・11以降いろんなことがありました。そんな中、人との絆を確かめあう年になったように思います。母の枕元に季節の花を飾る毎日、自然の美しさを愛でながら紅葉を楽しんで頂けたら嬉しいです。

中西 慶由 目代 京都

季節がくると虫が顔だし、花が咲く青葉はそよぎ、やがて色づく淡々と生命をつなぐ。自然の強さ、たおやかさに倣う。祈りの紅葉。

藤原 慶陽 総華監 京都

私の作品は後期の正面左側スペースにグループ参加させて頂きました。大作で戸惑う中、コミュニケーションから始め段々形になっていき、最後に仙齋先生のご指導でも重み、重なりが充実され立派な作品が出来上がりました。

森本 慶隆 総華監 京都

奥井 慶和 総華監 京都

私にとって花とは、華、いやし、なぐさめ、いのち、さまざまなものとして付き合ってくれるもの。そしていけばなとは、花との語り、そして人への語り。いつまでも心の友として、花がそばにいてくれますように。

村松 慶真 華監 大阪

いけばなを習い始めて十年余りになる。ますます四季の移ろいや自然の尊さ、美しさを感じ取りたいと思うようになった。人の心をなごませる花をいけられることの喜びや感謝も深めていきたい。





「秋空の下」

花材 大柚^{ダイダイ}（鬼柚）

大輪薔薇

薔薇

花器 黒文陶花器

（森野泰明作）

古賀 慶暢 総目代 大阪

最近私は後期高齢者に入った。公に人生最終盤に入ったと。かかる私では古色雑然とした「お花」になりそう。さ・あらば同席の若いお二人にまかせて、秋の明るさ、秋色のあでやかさを表現していたらどう。

大丹生 慶愛 華監 大阪

いけ花を習うようになり、四季折々に咲く花や植物など、それぞれの持ち味を生かせる表現の仕方がわかるようになりました。花を通して多くの方たちとの交流を深め、楽しく学び、心の支えにしたいと思っています。

岡下 慶佳 華監 大阪

会場は沢山のお花が活けられます。花の香り、華やかさ、いろいろな感情と感動を私自身、そして皆様方に感じていただけたらと思います。

「対にいける」

花材 パフィオペディラム

ジゴベタラム

ケール二色

花器 ガラス花器二つ

（チェコ製）

辻 慶清 総目代 京都

川田 慶美 目代 京都

母のいとこが桑原専慶流の先生で、母が「花習いに行くか」「うん」と中学生の時に習い始めました。それ以来五十年、花の取り合せ、花器選び等悩みながらもワクワクドキドキ。古い歴史と新しい発見に魅力を感じます。

中村 慶廣 目代 京都

いけばなは芸術……といつも思っています。花も木も草も、それだけで美しい。それらを何種か取り合わせ花器にいくと、更に美しくなる。色彩と形と出合いの芸術。より美しく輝くいけばなをいけて行きたい。

岩井 慶悦 目代 京都

移り行く季節は美しい大自然の中で、そこはかとなく風情を添える花々が満る。生け花に接する事で心が癒され、和ませてくれる。「文化芸術は魂の食べ物である」とある作家が述べています。大自然と周りの環境に感謝です。



「オンシジューム」

花材 黒色カラー

オンシジューム三種

ミリオクラダス

花器 ガラス花器

岡本 慶徳 目代 京都

三月十一日、TVの前で立ちすくんだ。私に出来る事はいくつあるだろう。花の力を借りるのは一つの手だ。祈りつついけばなを仕上げてみる。どうか、見る人に寄り添い生きる伊吹を感じてもらえるいけばなに、と。

富田 慶礼 目代 京都

お花にも表情があります。お花を生けるときに、お花に触れ、良く見つめることで、それをうまく見つけ、引き出してあげることができればと思っております。風が通りぬけていくような自然な作品が好きです。

中山 慶元 目代 岡山

人とのつながりのチャンスを先生より頂き、生け花を学ぶ事は、人とのつながり、湧き輝き出る想いを伝える事と感じています。花に没頭し、感謝し、明日に向かう温かい花を生け、豊かな秋になりますように願います。

大野 慶友 総華監 京都



「ガラスは水・ヨーラン」

花材 カーネーション四色

スプレー薔薇

トルコ桔梗

ミリオクラダス

花器 青透明ガラス花器二つ

(ヨーラン・ヴァルフ作)

青色ガラス花器

長谷川 慶文 目代 京都

大江 慶昌 華監 兵庫

服部 慶晴 華監 大阪

生け花を通して木木や花花の由来を学び、造形の見事さ、色合いの美しさに感嘆する日は楽しく、心豊かなものとなった。花材を愛で乍ら生ける、それは至福の時間でもある。この思いを皆様にお伝え出来ればと願う。

伊藤 慶和 師範 京都

家元のお言葉で今も心に残っているのは、桜を手に取り「賀茂川に咲いているように生けましょう。」というものです。京都ですから賀茂川なのでしようが、その花を自然の中のごとく生ける。すーっと心に入りました。



「つくる」

花材 山の木
花器 白釉陶大壺
(中野和馬作)
細口陶花瓶

前々回の流展「花の旅人」で、入り口に大きな絵を背景にして父と母が花をいけていた。その絵を描いたのがこちらの藤井慶也(隆也)さんである。ドイツ、イギリスを行き来して創作活動をされながら、京都の川端通にある「ヴァイスラウム(白い部屋)」というギャラリーで世界のアートに触れる場を提供されている。ギャラリーの奥にはいつも藤井さん流の花がいけられている。今回は二つのいけばなから生まれる何かを感じて・・・

小泉 慶哉 目代 京都

秦 慶久 華監 京都

藤井 慶也 師範 京都

岡野 慶裕 師範 大分

「海葡萄」

花材 海葡萄
アマランサス二色
花器 二穴陶花器
(ザールバーグ作)

佐藤 慶由 総華監 東京

植物の出生を大事に葉一枚も大切に活ける一月の水仙、五月の杜若、七月の檜扇、暮れの万年青が毎年楽しみです。特に好きなのは秋の菊の、一色活けです。素子先生のお稽古を思い出し、懐かしさで胸が一杯になります。

釜井 慶経 華監 東京

過日「浜田庄司展」に立ち寄った。作務衣姿でろくろを引くイメージとは異なる、英国製の帽子とスーツを好んだ浜田の私生活に焦点を当てたものだったが、「黍文」が大胆に描かれた浜田らしい大皿が目を引いた。早速、黍とナデシコを合わせ竹籠に生けた。爽やかな秋風が頬に触れた。

佐藤 慶美 華監 東京

私がいけばなで一番嬉しく感じるのは、活けた花や枝がどれも生き生きとして見えることです。植物にも人間と同じように個性があるので、それぞれその長所が活かされて、最も輝ける場所や形におさまると、とても嬉しくなります。

上野 慶里 華監 東京

花と器が一体となった自然の姿を表現する空間。花を愛で、花と語り、無心で花と向き合い、五感で心に受けとめる。初めての京都での出展は、新たな感覚を芽生えさせていただく一歩になる事と思います。





「楓」

花材 楓

鶏頭

花器 銀織部陶花器

(柳原睦夫作)

金属花器

流展ポスターの紅葉は以前日本いけばな芸術展で母と共にいけた想い出の花の写真。そのイメージで後期の会場入り口に迎え花をいけてもらった。左側に七竜チーム。右側に楓チーム。紅葉ものは一日で葉が悪くなる。少しの傷みにも妥協することなく、毎朝ほとんど枝を生け直してくれていた。それぞれのチームに敬意と感謝を。

仙溪

中村 慶佳 総華監 滋賀

：花よりほかに知る人もなし・・。花の心を知ろうとすればするほど、自身の姿を映してしまうようです。語りかけるのか、教えられるのか、すべては花のみぞ知る世界。そんな状況を楽しめるようになりたいと、思います。

尾関 慶園 総華監 京都

鹿野 慶正 総華監 滋賀

いけばなを通して素敵な方々に出逢えたことを、幸せに思っています。今回のいけばな展が、御来場いただいた皆様に平和と希望をもたらし、東日本復興の力となりますよう、真心込めて生きたいと思っています。

井尻 慶聡 総華監 京都

北川 慶則 華監 京都

中川 素心 師範 京都



「グロリオサ」

花材 グロリオサ

花器 ステンドグラス花器

(瀧本雅美作)

ステンレス棒

安藤 慶津 華監 京都

花は誰に命じられるでもなく美しく咲く。生物学的には主の保存の為なのだろうが、その健気さに私はいつも心を打たれる。土に根を張ることを絶たれた切り花には、目や手を掛けてその健気さに精一杯応えたいと思う。

近藤 慶聡 師範 京都

「昨今のご時世、苦しみや哀しみを乗り越えて前を向いて歩んでいけたら」とそんな願いを無数の花に託したいです。時折立ち止まって深呼吸した時、目の前にいつも花があつて幸せだなあと皆に感じてもらいたいです。

谷口 慶喜 師範 滋賀

花を通して感じるとても広い世界。花に触れていると心が透き通ります。手にした人に託すしかない。そんな健気な花に最後まで気持ちよくいて欲しい…と未熟ながら生けていますが、実は私自身が一番花に癒されています。

村田 慶紫 師範 京都

私にとって何もかもが初めての経験になった今回の流展は、とても思い出深いものとなりました。他の方と一緒に花をいける事を通して、自分の至らない所、お花と向き合う姿勢を教えて頂きました。先生をはじめ先輩方有難うございました。



「苑」

花材 大銀竜

カラー二色

紫陽花二色

花器 紺碧陶大永盤

(ザールバーグ作)

吉田 慶圓 華監 福井

花は人の心を和ませると同時に、生ける私の心も和ませてくれる。秋にしては爽やかな色あい、清々しさを感ぜさせる今回の花々。私が最も好きな配色のひとつである。花たちのいつもとは違う表情を見るのも華展の楽しみである。

金岡 慶希 華監 京都

「出展が決まってからお花が変わってきた。」同じお稽古場に通う方が下さった言葉です。今回は友人、従妹と一つの作品を出すというまたとない機会でした。いただいた言葉を生かすべく頑張ります。

新井 慶晴 師範 京都

「イメージを充分膨らませてから活けるお華は、活けていて楽しい」とお稽古の度に感じます。今回、協力して一つの作品に取り組む機会を頂き、より豊かな発想をもつてお華に触れられる事がとても楽しみです。









花を詠む「いけばな」

自然の息吹を敬う心

大地から切りはなされた花に、
新たないのちを吹き込む。

「生かす」ための「型」と「技」の習得。



山茱萸と椿の生花



丸葉の木・白花杜鵑・山鳥兜ほかの立花

花色に心を遊ばせて

花と花、花と器、
場の演出で、つむぎ出す色。

心に刻まれた色を、いけばなで表現する



カラー・アンズリウム・カラジウムの盛花



鉄線・向日葵・山荷葉の盛花

新たな出会いを楽しむ

舞台の演出家や指揮者のように、
花のドラマを生みだす。

花の故郷とその生い立ちに思いを馳せる。



蔓梅擬・糸菊・オニボウの投入



金鎖・紫陽花の投入

花展会場パネルより

花展会場パネルより

桑原専慶流のいけばな

(花展会場パネルより)

初代 桑原富春軒仙溪

江戸時代前期の貞享（元禄
（二六八四〜一七〇四）ごろに活
躍した立花の家元。
当時、京都六条本願寺に仕え、
花道の達人として有名であった。
貞享五年に著した『立花時勢
粧』は三百余年を経た現在に至
るまで、いけばなに大きな影響
をあたえている。



「紅葉」色」立花時勢粧より

立花時勢粧

富春軒仙溪が著した立花の伝
書で、貞享五年（一六八八年）
に八冊本として刊行された。
草木の出生、立花の技法と道
具、立花の作意や技巧理論を述
べた『立花秘傳抄』五冊と、作
品図による花形解説の『時勢粧』
三冊から成る。
植物の自然にある形、出生の
あらゆる状態を深く観察して、
それを立花にとり入れることに
ついて、それまでにない自由な
解釈と方法を試みている。

「苔晒木をつかうに習いあり。
例えば人の子を養うて我が子と
見るように育てる心をもつて指
すべしと云えり。されば鎌倉の
柏樹に熊野の晒木。その生所万
里へだつといえど瓶上に立て合
わするに体用和合して一木の景
気をなす。これ立花の妙にあら
ずや。初心巧者によらずこのさ
かいをよくよく工夫して上手に
なるべし。花道の楽とするとこ
ろこれより外はなし。」

秘傳抄之一「常磐木の部」より

「牡丹は花王という名を貴び、
高位高官の御方にて宗匠の外門
弟の指すことを許さず。古代は
花大切なるゆえ木を残して茎よ
り切り、筒に入れ、胴に用いて
請副に使わず。誠に立花の道理
さもあるべきことなり。然れど
も近代、心請添に用いるは世上
沢山にて時相応なるべし。」

立花秘傳抄之二「花の部」より

「つやと云うは幹太く、こわご
わしき物には美花美葉のやわら
かなる物を外よりそえ、又は内
よりたよらせて立つる時は、す
るどなるものも柔らかに見え、
けやけきものも賤しからず見ゆ
るなり。これ立花第一の教えな
り。」

あしらいと云うは葉のなきも
のには葉ある物を取合、丸きも
のには細きもの、軽きものには
重き物、かたきものには柔らか
なる物、勢いたる物にはなびき
たる物、直ぐなる物には曲がり
たるもの、この外あまたあるべ
し。」

立花秘傳抄之二「花の部」より

【記録】

桑原専慶流いけばな展 「花を詠む」

会期 11月2日(水)〜7日(月)
会場 大丸ミュージアム〈京都〉
出品者 二五六名
桑原仙齋 櫻子 慶華
仙溪 素溪 慶寅

桑原専慶流師範会一七〇名
桑原専慶流岡山県本部八〇名
前期展「古典調」三八作
11月2日(水)〜4日(金)

後期展「現代調」三九作
11月5日(土)〜7日(月)
開場時間10時〜20時
但し4日と7日は16時30分開場
入場無料

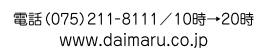
◎協賛者 三二九名
◎東日本大震災義援金募金
一五七、七七七円

会場の募金箱にお寄せいただいた義援
金は、日本赤十字社を通して被災者へ
の支援にあてさせていただきます。

◎入場者数 約一万二千人
◎京都新聞広告
10／30朝刊テレビ面5段カラー
◎京都新聞記事
10／29朝刊「心模様花に託して」
11／2夕刊「秋の美小宇宙」

青木赤澤浅野足立阿綾部荒安家猪生石井石井石井石井石川石黑崎石原磯板市逸伊藤葉井上井上今村妹岩谷岩上上野	慶梨啓裕慶厚慶華洋泉奈子要順喜美月三子泉美尚富苗香緒華敬竹翠雅佳光正慶弘慶佳	植松上山内采女宇野江澤本藤延大口大角大槻大野岡小笠田方尾北奥村越尾高小野尾原梶谷岡片側角野南狩谷山	野松上村山女野宇野江澤本藤延大口大角大槻大野岡小笠田方尾北奥村越尾高小野尾原梶谷岡片側角野南狩谷山	直秀妹花靖弘富知美嘉和美朋泉晃志智左澄廣祐慶澄慶玲慶佳湖節紫典志泉慶文操幸芳雲里千秋	川合川崎河内河村元菊川岸本北口吉川木戸鬼頭京極清友久保久米栗住桑五并小河小坂兒島小菅小西小橋	道靖富博惠昌昭里のり慶納慶展慶貞慶由慶和慶麗慶純慶彩慶美慶德慶佳慶智慶純慶春加志右慶智	小林原小堀森小近坂阪本佐實佐崎塩賀品川柴田清水下村白神白神白神白髭杉浦鈴木須田閑空高木高田高塚高橋	茂紫陽子慶正修慶聖苑慶久慶真慶純慶齊慶有慶淳惠風祥仙慶朋敬芳美泉慶紀慶節慶秀慶風慶壽慶正慶紘慶詠慶謠慶春慶雅	水雲陽子慶正修慶聖苑慶久慶真慶純慶齊慶有慶淳惠風祥仙慶朋敬芳美泉慶紀慶節慶秀慶風慶壽慶正慶紘慶詠慶謠慶春慶雅	高橋高山武政田尻多田館巳田中田中田辺岡月辻際土寺川寺西寺村外川永国中桐中島中西野中原中原中村中村	慶利慶益慶慧豐容し文慶美慶百慶康慶貴慶檀慶裕慶恵慶妙慶雅慶朋慶枝慶江慶史慶敏慶美慶循慶富慶泰慶波慶浩慶恭慶章慶千慶希慶貴慶智慶博	中山難波新居西西野西堀西村西山沢野信田橋本蓮岡早川林林早瀬柳原原原原原阪東比喜平川平土	弘朋慶敏成華慶弘如水慶麗政峰慶優慶早慶友慶孝慶芳慶康慶麗慶知一慶英幸慶光慶文慶倫慶智慶映恒泉慶步慶厚慶幸慶花慶道慶久慶芳慶清慶晴	田福井福原藤井藤原藤越文野堀前川増井松浦松田松野松村松本松本三木三水田水畑三峯宮内宅三宅宮崎宮西弥吉	苗慶香慶佐美仙喜苑晚泉慶登慶草慶貴慶隆慶鶴慶治慶光慶襟慶梨二蓉慶祥謙美蘭華慶圭雅昇規艶慶貫芳慶綾慶尚慶秀慶理慶咲慶洋慶静慶華良水慶津	向井村上目森守田森永守本森谷守屋守屋矢部山山山山山山湯村橫山横山吉田吉村吉原若和田和田渡辺渡辺	慶利慶裕慶類慶恭慶葉慶節慶真慶孝慶邦慶薦慶昌慶枝慶文慶洋慶幸慶知慶惠慶弘慶美慶佳慶津慶種慶榮慶祥慶裕慶希慶愛慶華慶生慶晶慶映慶香慶桂慶正慶賀慶和慶緑慶惠風
---	--	---	---	--	--	---	---	--	--	--	--	---	--	--	--	---	---

桑原専慶流ホームページ//www.kuwaharasenkei.com 本//ikebana.free.makeshop.jp



DAIMARU
www.daimaru.co.jp

